
金剛の武人

パーシアス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金剛の武人

【Nコード】

N0087Z

【作者名】

パーシアス

【あらすじ】

俺の名前は岩元昌也。高校2年生だ。ある日、金髪の美女に、異世界に來ないかと誘われる。冗談だと思っていついたら本当に異世界。来ちゃったもんはしょうがないから、ここで過ごそう。

主人公最強ではありません。また、主人公がハーレムを作ることもありますのをご了承ください。

初投稿ですので、誤字脱字、文章の幼さが目立ちますが、お許しく

ださい。

初投稿なので、評価とかコメントしてくれると嬉しいです！
ていうか、超欲しいです！

0 話（前書き）

これは初投稿作品ですので、温かい目で見守ってくれると嬉しいです。

ものすごい下手ですが、最後まで読んでくれると嬉しいです^^

0 話

俺の名前は岩元昌也。とある学校の高校2年生だ。頭は・・・いい。だが、それも意味はなくなつた。

なぜなら今俺は異世界に来ている。いや、連れてこられたというほうが正しいだろう。

自分も実際何が起こつたか理解に苦しむ。辛うじて分かるのは自分が違う世界に来たということだ。

「マサヤ君？」

誰だ？ そうだ、俺をココに連れてきた人だ。

女性で髪は金髪で肩あたりまでの長さだ。そして綺麗だ。

なぜこんなことになっているかというと、ある日、高校からの帰り道、俺はこの女性に声をかけられた。

「君、違う世界に行つてみない？」

唐突すぎた。3秒ほど頭の整理に使つた。日本に金髪の美女がいることも不思議だが、俺はあまり深く考えなかつた。冗談だろうと思いつながらその人があまりに綺麗だったので、行けるなら行きたいと答えてしまった。そしたら、

「じゃあ決まりね。あなたに関する記憶はマスターに頼んで、この国から抹消しておくから。」

オイ待て。マジで？

暗い路地にもものすごい力で引き込まれ、金髪が何か唱えると、黒色のどこでも アに似たものが出てきた。もう逃げれないと思つた俺は、その中に・・・入つた。

中は真っ白だつた。10秒ほど歩くと出口が見えた。出ると、砂漠。そして目の前に20メートルはあるかという門。

俺はただただ口をあけるしかなかった。そんな時、金髪が、

「君、名前は？」

と言う。

「岩元昌也です。」

「聞かない名前ね。あ、違う世界かw」

ふざけてるのか？と思いつつ、名前を聞き返した。

「メアリーよ。」

「すいません、メアリーさん。ここはどこですか？」

「ここはミリシア。私はとある集団の一人でね、今回私はここに依頼で来てるのよ。」

・・・俺なんで呼ばれた？

「今回の依頼はちよつと一人じゃきついから君を連れてきたってわけ。」
なるほど。

「君はみたところ魔力が多そうだったから来てもらったわ。あつ、そつだ、この石に触れて。」

そこには黒い石。俺は手に乗つけた。すると石は、光りだした！という反応はなく、黒いままだった。

ちよwこれ大丈夫w？

「ええ？！多いのは魔力だけ？？でも属性はある・・・」

やばい？これやばい？

ずっとメアリーさんが黙っているの、たまりかねて声をかけた。すると

「君は魔力量が普通の人より多い。けど、魔術を使うのには適していない。」

え、それって結局ダメじゃんよ。メアリーさんよ。

「しょうがない。君には体術を仕込むわ。依頼の期間は2週間。今

から5日間であなたには基礎を教えるとするわ。いいわね？」

その後の説明によると、俺は魔力を具現化する能力が低いらしく、魔力によって、肉体強化するしかないという。だが、そのうち少しは魔術も使えるようになるだろうと言われた。それならいいかなと、承諾した。

とりあえず、町に入ろうといわれたので門を抜け、民宿のようなところに入った。

町は広がった。ものすごい。こんなところで何するんだろ、と思った。

その後、特訓が始まった。最初は魔力を感じるという訓練だった。「神経を集中すると何か流れてる気がしない？こつちの世界なら君は間違いなく感じれるはず。」

右手に神経を集中した。確かに温かいものが流れている気がした。

「あとはイメージしだいよ。それを手全体に広げてみて。」

イメージ・・・してみたがさすがに無理だった。

今日はずっとコレを繰り返えすらしい。

4時間後、ずっと俺はがんばってたのにメアリーさんというと風呂に入り、飯を食べ、テレビを見て爆笑している。

クソ野郎、いつか見てろよ？

そんな俺も、魔力を広げられたらしい。力の入り方が違う。

「できたっ！」

「ふーん、じゃ次は足ねー」

足もすでに終わっていた。

常人より少し早いスピードでメアリーさんの前に立った。

「あら、早いわね」

「ちょ、メアリーさん適当じゃないすか？」

「メアリーさん？違うわ、師匠よ。」

どうでもよっっ！！

「まあいいわ、今日はコレでおしまい。明日は本格的に行くわよ。もっと上手くなればここまで・・・ほら！」

ええゝ早すぎゝw

その夜

悔しかったからかメアリーさんが寝たのを確認し、ずーっと、自分で訓練していた。

「あの子、以外にがんばるわね。私も教えるなら私を超えるくらいに育てなきゃね。」

おきていたのかメアリーはこう小声でつぶやいた。

1話

目が覚めた。ああ、そうだ。ここは異世界。もう俺に帰あよびる場所はないんだった。

母さん、何してるかな。父さん、仕事クビになってないかな。

学校の友達、祖父母、親友、前の世界のあるゆるものが頭に浮かんだ。

昨日までは何もなかったのに、今日になってさびしさがこみ上げてきた。

でも、もう遅い。ここで生きるしかないんだ。

そう思いながら、体を起こした。

涙が出てきた。

「マサヤ君、起きた？」

メアリーさん、いや師匠が呼びかけてきた。

とっさに涙を堪え、拭く。そして

「はい、起きてます」

と答える。

もうこうなったらここで生き抜いてやる。

「今日は何やるんですか？」

「ええ、今日は買い物よ」

一瞬で緊張感が抜けた。

だって、本格的つつつたのに買い物だよ？

「まずは服。そして食料、あとはまあ安い武器かな。」

服、あ、学生服やんけw

今更ながらここだと超恥ずかしいw

で、ここは民宿？を出て15分ほどあるくと商店街についた。ここはある程度のものなら何でもそろっているらしい。

まずは服だが、ここでは、ドラ エの村人のような服が一般的だった。ということ、後は、ご想像にお任せします。

師匠もこんな感じだ。

店の裏を見ると、黒とも濃い青ともいえる物体が動いていた。すぐに居なくなったので、気のせいだろうとあまり深く考えなかった。

「ところで師匠、依頼って何ですか？」

「何言ってるのよ、あなたまだ戦えないじゃない。」

戦うのかいw

食料市場にて・・・

前の世界の食べ物とほとんど同じだった。

俺は師匠の買い物を見守りながら、何作るんだろうとワクワクしていた。

ここでもさっきの物体を見た。けれどまた気にしなかった。これがあとあと関係してくるとは、昌也は思ってもいなかった。

続いて武器屋。

剣やら杖やら槍やら・・・もう何でも揃っていた。

使えなさそうな枝まであった。

「そうねえ、マサヤ君には体術を極めて欲しいから、この銅い籠手にしようかしら。」

銅は魔力を比較的通しやすいらしい。もっと上質なものもあるがらしいが。

「まあ、今は戦力にもならないし、これにしようか。」
酷い、傷ついたw

「さあ、買うもの買ったし、帰ろうか？」

「はい、そうですね。」

昌也とメアリーは、商店街を後にした。

一方さっきの商店街の裏では
黒っぽい青っぽい物体が増殖していた・・・

そのころ、民宿に戻った二人はこんな話をしていた。

「マサヤ君、私はある集団に所属しているといったでしょ？」

「はい、それが？」

「これから行動を共にする上で知らなきゃいけないこともあると思うの。今から君にはその話をしようと思うわ。」

「分かりました。お願いします。」

「私の名前はメアリー・ティーフ。フィアラルという組織の一人よ。メンバーは私を含めて7人で、剣使い、銃使い、魔術使いとか、とにかくいろいろいるわ。」

おかしい。俺、どうみても必要ないw

2話

おかしい。俺、どうみても必要ないw

「何故俺を？ 必要ないじゃないですか。何か少数精鋭っぽいし。」

「言っただでしょ？ この依頼は一人じゃ無理なの。君の力が必要なんですよ。」

「はあ、本当ですか？」

「本当よ？ 信じなさい。」

意外と疑い深いわね・・・

その後、3日目、正拳突きなどの基本技

4日目、魔力を流しての基本技

5日目・・・師匠との組み手

「全力でかかってきなさい？」

「はい！」

まずは深呼吸。相手の表情、呼吸、予備動作を全神経を集中して観察する。まずは俺が左足を出し、右の正拳。メアリーさんは軽々かわし、左手で俺の右腕を引っ張り、その勢い右肘を俺の胸に入れようとする。俺はそれをギリギリで右にそれてかわす。

冗談じゃない。強すぎる、洒落にならない。

今度はメアリーさんが動く。右手が動いた、と思ったとたんに左手が動き、正確に俺の腹部を捉えた。

俺は思わず悶絶した。

「なかなかいい感じに魔力をコントロールしてるけど・・・まだま

だね。あなたは攻撃を防がれることを考えていないわね、それで力ウンターを食らう。次からは気をつけるといいわ。」

「うっうっ……」

そのまま丸一日が過ぎた。俺もだんだんと慣れてきた。

でも、やっぱり強すぎた。一回も勝てない。明日から俺も参加だつてのに……

「今日はもういいわ。ほんとに100分の1ぐらいしか教えられなかったけど、明日から仕事よ、今日は早いけどもう寝なさい。」

「はい、おつかれさんした〜。」

大丈夫だろうか。

依頼ってどんなのだろ、今までの修行からして、戦うよね……

一人不安を抱える昌也であった……

3話

「おはよう、マサヤ君。じゃあ、まずは依頼の説明ね。この街にベビードラゴンといわれる魔物が大量発生してるの。ドラゴンじゃないわよ？でも、集まるとほんと厄介だから君にも手伝って欲しいの。」

「手分けして倒そうということですか？」

「そうよ。それでこれを・・・」

マサヤは携帯？をもらった。これで連絡を取り合っらしい。

「分かりました。じゃあそのベビードラゴンの特徴を。」

「全体的に黒っぽくて、何がなんだかよく分からない生命体よ。一匹だと大して強くないけど、集合するとドラゴンのように大きくなる。それが一番厄介なのよね。」

アレじゃん。 なっちゃうヤツじゃんw

「これから一週間、君と私は聞き込みを行う。だけど、ベビードラゴンの集合が近いようならば今にでも動く。だけど、ソレらしい情報・・・」

「「「「きゃあああ！！！！」」」」

「「「！！！！」」」

「早すぎよ・・・どうなっているの？まあいいわ。とにかく来て。」

誘われるがままに現場へと駆けつけた。

そこには、ボーリング球ほどの黒っぽい物体が2つ。・・・コレか。

「ちょうどいい。マサヤ君、見てなさい。」

メアリーは足に魔力を流した、きれいな足だなくなんて見とれてみると、そこにはもうメアリーはいなかった。

そして、黒い物体が水平に飛んでいた。

メアリーが蹴ったのだ。昌也も早すぎて（集中してみていなかったが）捉えられなかった。

その魔物は、泡のように消えていった。

俺もやってみよう。

幸い魔物は弱い、師匠同様、足に魔力を流し込み・・・一気に距離を詰め、蹴り飛ばした。

まだ死んでないらしく、もがき始めた。そして、分裂した・・・

「マサヤ！早く！そいつらは10体集まると・・・」

周りから魔物が5、6体現れた。一点に集まりグニョグニョと蠢いた。グロイ・・・

そして、人一人ぐらいの大きさになった。ほぼ球体だが。

「くっ！マサヤっ、行くわよ！」

「は、はい！」

メアリー、魔物の目の前に移動し攻撃を繰り返そうとしている。明

らかにあせっている。

魔物から何本もの手が現れた。メアリーはとつさに退いた。

しょうがないわねえ。とつぶやいたのが聞こえた。メアリーの手が燃えていた。魔術である。

一気に距離を詰めて2発、3発、4発と攻撃を繰り返して、退く。

魔物の5分の1が削られた。だが周りから魔物がウニョウニョと寄ってくる。

昌也はその魔物を迎撃する。だが、間に合わない。
10体集結した・・・

一瞬で巨大化した。15メートルはある。黒い竜だ。
メアリーさんは冷静になっていた。

「マサヤ君、私、ちょっとだけ本気出す。」
と言うといきなり雰囲気が変わった。

魔力の量が大幅に増加したのが一目で分かる。

「いくわよ・・・ヴォルカランス。」

目の前に、炎でできた槍が現れた。ソレを手に取り、まず、集合していない魔物を焼き払った。

「すごい・・・」

マサヤは思わずつぶやいた。

そんな中、ドラゴンは分裂しようとしていた。

「させないわよっ！」

槍が一気に10メートルぐらいたままで伸びた。

そして、頭を切り落とした。切り落とされたほうの竜は消えた。
だが、分裂した方は生き残っていた。

「マサヤ！あなたがやりなさい。」

槍を俺に向かって投げてきた。

「大丈夫！君にも火属性があるから！」

槍を受け取ったとき、槍の炎がさらに激しく燃えた。

「！」

今の俺ならやれる。

一気に腹部に接近、黒い手が伸びてきた。

「くっそ！」

槍ではリーチが長すぎる。一回手放し、手と足を駆使し、すべて落とした。

そのとき、手足が光ったように見えた。だが、気にしない。すぐさま槍を拾い、腹に突き刺した。どんどん赤くなっていく。

それを引き抜き、腹の下を潜り抜け、しっぽを切断する。軽い。振り向きざまに、槍が伸びた。意思を反映するらしい。翼を落とす。

「グググオオオオオオ！！！」

もはや竜ではない魔物の頭部めがけて槍を投げつける。

音はなかったが、命中したようだ。頭のほうから泡のように消えていく……

勝った。できた。

槍は消えて、力が抜けた。膝から崩れ落ちる俺を、師匠が支えた。

気づいたら、さっきの民宿だった。寝かされている。

「起きた？」

声が出ない。

「起きたようね。君は魔力の使いすぎでこうなってる。そのうち良くなるわ。」

「ありがとうございます。と首を軽く曲げる。

「それにしても驚いたわ。あなた意外とやるわね。じいさんが目をつけただけある。」

「じいさん？誰だ？」

「まあかなり早く依頼は終わったけど、まずは休むといいわ。そしてたら帰るわ。」

「あ、あと君のことだけど、君は、火、雷、氷、土の属性がある。多いわ。そのうち、使いこなせるようになる。そして、君はおそらく、魔力が多いだけではない。何かある。まだ分からないけどね。」

「もしかして、さっき光ったヤツか？」

「瞼が重くなってきた。もういいや、考えるの面倒くさいわ。俺は意識を手放した。」

「なんなの？この子。もはやセンスの塊よ？」

「じいさん、やっぱりあなたの目は狂っていなかった。私はこの子を絶対連れて帰ります。」

「マサヤの未来を創造しながら、メアリーも眠りについた。」

4話

「マサヤ君、準備はいい？」

「okです。」

「じゃあ、フィアラルへ行くわよ。」

「はい。」

疲れは全部取れたわけではないが、そのフィアラルというものが楽しみだったので、早く出発することにしてもらった。
ここからだと言約三日かかるらしい。

・
・
・
・

帰り道の砂漠にて

「すみません、この前のようにドアみたいなヤツはださないんですか？」

「あれはとても魔力を使うのよ。あれは2週間ぐらいしないと使えないわ。わざわざ君のために使ったのよ？感謝しなさいよ。」

言わなきゃ良かった。

「それにしてもおかしいわね・・・あんなに早くベビードラゴンが集合するなんて・・・」

俺はまったく知らないのなんとも言えないが、とにかくおかしいらしい。

「君の魔力が関係してるのかしら。」

「それじゃあ俺、厄介者じゃないっすかw」

「普通はありえないんだけどね・・・」

ほんとに俺か??

「そろそろお腹がすいたわね。はい、干し肉。」

硬えー、しかもしょっぱい！

「うう・・・」

「ちよつとしっかりしてよ。これからの主食はコレよ?」

これから三日間、こんな生活か・・・

「ふいあたるって何ですかね。」

「フィアラルは、小さいけどギルドよ。でも、皆が強すぎて、誰も入らないんだけどね。」

「それで今回も依頼ってわけですか。」

「ええ、そうよ。でも本当の目的はそこじゃない。君を連れてくることよが本当の目的よ。」

俺？

「フィアラルの長、フォーレルニアっていうんだけど、君の事を見つけて、私に連れてこいって言ったの。」

「そうなんですか。でも俺なんかでいいんすかね。」

「じいさんの目は間違ってたわ。君には素質がある。私にも感じるもの。」

正直、にやけてる。隠せないから下を向く。

「マサヤ君、家族のこととか、友達のこと思い出さない?」

いきなり聞かれて正直驚いた。しかし、思い出すに決まってる。

「実は、君の前にもう一人そういう子がいるのよ。君は覚えてないかもしれないけど、その子は君の事をしっかり覚えてる。」

そういわれた瞬間、頭の中では、たくさんの情報が飛び交っていた。

昔の友達？

そういえば、何か普通の日常で違和感があつたような・・・
親友だったりするのかな？

しかも強いのか？

「名前は何ていいますか？」

「思い出して頂戴ね。ユウトよ。」

ユウト、ユウト、優斗・・・優斗！

神埼優斗だ！

「思い出しました。俺が、あいつを忘れるなんて・・・」
「しょうがないわ。じいさんの魔術はどれも強力よ。」

でも、優斗がいるとだけで、どんなに心強いことか。

「会いたい？」

「もちろんです！」

「じゃあ早く帰りましょう。」

「はい！」

優斗、今何してるんだ？

5 話 影

出発から2日が過ぎ、あと丸一日歩けば到着らしい。

すごい疲れた。足が棒のようとはこのことを言うのだろうか。

メアリーさんの足はほんとに棒のようなのに彼女自身はピンピンしている。こんなアリだろうか。

「はい、干し肉。」

「どうも。」

慣れというものは怖いものだ。あんなにまずかった干し肉が今は何ともない。

それはさておき、遠くに1つの黒い物体が見える、なんだろう。

「マサヤ、魔物が異常な行動を見せた理由が分かったわ・・・」

「えっ、何ですか？」

「あの人影よ。あれが真犯人ね。」

「何ですかアレ。」

「アレはフィアラルと敵対する組織、ガーディアのメンバーよ。」

近づくにつれて、容貌がだんだんと明らかになってくる。

黒いマントを羽織り、フードまで被っている。腰には・・・鞘。

「やる気ね。明らかに。」

謎の人間との距離が10メートルぐらいに縮まった。

そしてこう言った。

「メアリー・ティーフ、その男は誰だ。妙な魔力を感じる。」

「さあね、あなたこそ誰よ。」

男はフードを取った。男だ。

長髪で、整った顔立ちをしている。身長は180くらいか？
剣を抜いた、バチバチと音を立てている。帯電しているようだ。

「マサヤ、ここは私が何とかする。せめて捕まらないようにして。」
え？捕まる？そう思ったとたん、男が魔物を呼んだ。砂漠から手が
伸びている5本だ。

「ケイファンよ。捕まったらお終いよ。」
ウネウネと寄ってくる砂の手。キモ・・・

「さあ、覚悟はいい？男だから容赦しないわよっ！ヴォルカランス
！」

炎の槍が出現。長物に有利な位置をとる。男はさせまいと、距離を
縮める。そして足を斬りつける。メアリーは飛んでよけつつ、頭部
を貫こうとする。男は右によけ、剣を切り上げる。剣の残像からも
稲妻が見える。

「当たるとまずいわね。」

いったん退いて距離をとり、突きを繰り出す。すさまじい速度だが、
男はそれを、避け、剣で受け流し、すべて回避した。

メアリーは舌打ちした。異世界移動の際に、多くの魔力を消費した
ためか、思ったように力が出ない。男はそれでも容赦なく斬撃を繰
り出す。さすがのメアリーも、全力が出せないのでキツイ。

「どうした？そんなものか？」

「くそっ！」

「俺はガーディア第4部隊隊長、グリフ・モーガンだ。」

「知るかつての！」

槍じゃキツイわね・・・メアリーは槍を手放した。槍は消滅した。

そうね、相手は雷・・・ここは土はない、砂ばかり。何か・・・何

かないか？

そうだ！無属性なら・・・

「エルダージャベリン」

無属性、これは金属ではない。この武器がいつ作られたかは、メアリーも知らない。そこまで古いのだ。グリフが近づき剣を振りかぶる、メアリーは見逃さなかった。正確に腹を突いた。男は不意をつかれ、後ろに吹っ飛んだ。血がポタポタと落ちる。致命傷にはならなかったようだ。メアリーは距離を詰め、追撃しようとしたが、男は咄嗟に立ち上がり、後ろに下がった。そして、

「女が・・・、来い！ボルティジ！」

男の前に魔方阵が現れ、そこから人型の猿が現れた。

「なんだ？グリフ。今回はやばいのか？」

「そんなんじゃない、だが、俺一人じゃ無理だ。頼む。」

「あいよ！」

メアリー、顔が面倒くさそうだ。

猿は拳を帯電させた。「いくぜえ、姉ちゃん。」

「死ぬ。糞猿が！」

メアリーらしくない言葉を放ち、猿と距離を詰める。だが、グリフが邪魔をする。非常に厄介だ。せめて、魔力が全快ならば・・・とメアリーは考える。

猿の拳が飛んてくる。槍の柄で受け流し、そのまま攻撃に転じようとするが、グリフが斬り込んでくる。これはダメだと後ろに下がる。「ミリシアの魔物はあなたがやったの？」

「ああ、お前らに早く消えてもらうためにな。だが、その小僧、なかなかやるな。今のうちに息の根を止めておきたい。」

「させないわよ・・・！」

一方、昌也は・・・

「チッ！何だこいつら！」

苦戦していた。蹴っても殴ってもすぐに再生するらしい。砂があつてこそだが。

「もつと、圧倒的な攻撃力が・・・そうだ！」

メアリーが使っていた槍を思い出した。できるか？

手に魔力を集中させてみた。しかし、ダメだ。ん？また光った。何だ？

適当にケイファンを蹴り、手に魔力を更に集中させた。すると、パキパキと音を立て、手に変色していった。鉄・・・？鉄かはどうかまだ分からないが、とにかく硬くなっていた。これなら・・・パン！

ケイファンが弾けた。が、再生した。前より小さくなっている。

「へっ！これなら銅の箆手もいらねえや！」

適当に箆手を投げつけ、小さくなったケイファンを蹴る。すると、もう再生はしなかった。

いける。

これに属性が加われば・・・だが今はしょうがない。やるしかない。魔物は残り4体。魔物は何やら見つめ合い、何かを決断したように中心に集まった。そして、融合した。

「おい・・・またかよ・・・」

大きい、10メートルはある、黒い竜より強そうだ。そしてまた手が無数に出てくるだろう。

両手を硬化させた。魔物の形は手そのまま大きくなった感じた。一気に間合いを詰める。魔物はグーの形をとった。殴ってみたが少ししか削れない。防御力が格段に上がっている。その削った砂は再生していない。だが、まだまだだ。

これを繰り返していれば勝てる。そう思った。だが、手は、人差し指を俺に向けてきた。咄嗟に退いた。これは危険だ。人差し指から、圧縮された砂が発射された。なんとかよけた。弾は小さいが速い。手は、中指も俺に向けた。まずい。

人差し指と中指から、無数の弾丸が発射された。

6 話 砂

無数の弾丸が、俺に向かって飛んできた。まずい、避けきれない。体の前を金属化させたが、全て防げなかった。二、三発貫通した。痛い。

メアリーさんは遠い。やはり俺がやるしかない。メアリーさんも相当ヤバそうだしな。

手は指を上にもけた。弾を装填しているらしい。カチャカチャという音が聞こえる。今だ！足に魔力を流し、手に急接近した。しかし、閉じていた小指に弾かれた。なんだこいつ！？

俺もその魔術とやらが使えたらな。

さて、どうする。敵は砂、発砲出来るし、近距離も十分強い。防御力も場合によって高い。グーになった時、何かできることはないか？目は手のひらの中だろう。

なら、グーになったら背後に回ろう。パーになった時の防御力は分らないが、グーになるということは、元は防御力がそこまで高くない証拠だ。だが、あの手は360度回転するだろう。打てて三発だろうか。穴が空けばイイが。

ずっと沈黙してた俺に手が痺れを切らしたか、手を拳銃のようにした。新しいフォームだ。コレは強力だろう。

弾はデカかった。そのためさっきのよりは遅い。かわして距離を詰めた。

殴りかかろうとした。グーになれっ！

だが、まだグーにはならず、小さな砂の手が伸びてきた。どっかの錬金 師じゃないんだから。

どうやらこれを叩かないとグーになってくれないらしい。仕方ない、

多いけどやろう。

足を取られたらマズイから、まずは足で下の手をける、砂が散る。何時の間にかでが顔の前まで伸びていた。慌てて払いのける。

左足で踏み込んで、左手で手を三つほど壊した。あと七つほどある。腰のあたりから左肩に向けて手が三つある。これは、右の蹴り上げで片付けた。

俺こんなに柔らかかったっけ？

まあいいや。

とにかく残り四つ。本体の指のほうで何かグニョグニョやってる。時間がない！

残り四つ、左手で手を掴み膝で粉碎。右ストレートで左側の手首を打ち抜く。そのまま左の裏拳で右側の手を破壊。あとは適当に殴って片付ける。指がこつちを向いた。

指がドリルになってる！！

ズガアアアン！

あつぶね

間一髪でよけた。穴が空いてるし。

まだ空中でドリルがグイグイグイと音を立てている。今しか無い。俺は手のひらに渾身の右ストレートを入れた。

砂が飛び散った。返り砂？を浴びた。なんか臭いw 穴は空かなかった。だが苦しんでいる、それは

分かる。右の足の裏で同じところを蹴る。まだ穴は空かない。もう一度右手に魔力を込めた。さらに光沢がました。

「うおおおおあー！！」

拳が貫通した。再生してない！

指ドリルの回転力が少なくなっていく。

最後の一撃か？ドリルが俺めがけて飛んでくる。遅すぎ。俺は華麗に避けようとした。だが、いきなり速度をあげた。そんな知恵があったのか！

！

とっさに腕をだしてしまった。ああ、もうだめだ。

アレ？

痛い？痛いだけ？

地面に穴が空いたほどの攻撃だぞ？俺の腕が耐えられるわけ無い。だが腕はある。この金属？はここまで硬いのか！使える。

そのまま力尽きたのか、手はボロボロと崩れる。

終わった、また勝てた。

闘いか、悪くないな。むしろ楽しい。

師匠、ありがとうございます。

7話 雷属性

ありがとうございます。師匠、ここに連れてきてくれて。

・

・

・

あつちで砂が崩れてる・・・勝ったのね、マサヤ君
私もそろそろ終わらせなきゃ。

「ケイファンがやられたか・・・やはり今潰さなければ。」

「あなたの相手はこつちよ！」

槍で猿を牽制し、視線をグリフに向ける。

猿が槍を払いのけ、メアリーに殴りかかる。

「馬鹿ね。アンタじゃ私の相手にもならないわよ。どいてなさい。」

顔面に飛んできた拳を紙一重でかわし、腕をつかみ、引っ張る。そのまま膝で腹を打ちつける

「グフッ！」

猿はうずくまっただがすぐに立ち直った。

「なめるなよ、姉ちゃん？」

怒ったようだ。雷の量が違う。どうやら本気らしい。

「いくぜグリフ。こいつは殺す。」

「ダメだ、人質にとるんだ。」

やられる前提かい。

メアリーは若干呆れつつも、槍を構えた。腰を低くし、槍の先端をいつでも突き出せるようにする。猿が人差し指と親指で三角形を作った。

「死にな。ボルトミサイル！」

3発の雷のミサイルが飛んできた。

「だから殺さないと言っているだろうが。」

知るか。こんなんで死ぬわけねえだろ。

一発は避け、槍の尻、先の順に回転させて2発のミサイルをそれぞれ撃墜する。1発目のミサイルが返ってきた。ホーミングか。

後ろに反って避け、蹴りで打ち落とす。

メアリーは驚くほど冷静だった。

ミサイルもかなりの速さだったが、そんな短時間で最低限のことを考え、撃破したのだ。

どうしようか、このままだとジリ貧になりかねない。私も何か召喚したいところだけど、魔力が……。男もあまり魔力は残っていないから積極的に攻撃して来ないんだ。やっぱり、まずは猿を片付けないとダメね。

「やるな、そんならボルトミサイルLV4！」

大きい。二倍はありそうだ。

メアリーも、エルダージャベリンに魔力を流す。

全部で6発。いけるか……

「黒金の閃！」

槍が空を切った。きれいな一文字が現れた。
ドガアアアアン！

ミサイルをすべて撃墜した。

爆風によつて、猿が吹っ飛ぶ。グリフが駆けつける。

「もういい、出し惜しみしないで、MAXを出せ。」

「分かつてるって、いくぜ！ボルトミサイルLVMAX！！」

今度は20発ぐらいあるかしら。20発ね。

これだけの数を一瞬で把握するのは神業だ。

メアリーの目の前に20発のミサイルが接近する。

黒金の閃では防ぎきれない。

左に走る、もちろん追っかけてくる。

「はっはあ！これで終わりだ！」

仕方がない、魔力が少ないけど、これしかない。

エルダージャベリンが赤熱する。そして少し太くなる。

狙いはミサイル、18発！

メアリーの目が、さらに集中力を増す。

「黒金の焰！」

狙いどおり、18発のミサイルが跡形もなく消える。

「まだ2発残ってるぜえ？ミスか！」

メアリーは無視し、ふうと息を吸う。

手を前に出す。

直径30cm程のブラックホールのようなものが現れる。両手に現れたソレは、残りのミサイルを飲み込んだ。
「何!?どうなってやが・・・グハアッ!」

猿が爆発した。猿の後ろにはメアリーが発生させたものと同じもの。そこからミサイルが出てきたらしい。

「うっう・・・」

猿はもう動けないだろう。なんせ無防備の状態で後ろからミサイルを二発も食らったのだから。

男も、動こうとしない。わざわざ召喚獣に遠距離攻撃させているんだ。奴は近距離専門だろう。

猿の背中は無惨に挟り取られていた。鮮血が砂を黒く染める。
男は歯軋りをしている。やっと力の差に気づいたか、馬鹿め。

「おい、グリフ・・・ダメだ。もう帰らせろ。」

「くっ・・・仕方がない。いつか駆りは返させてやる。それまでしっかり休んでおけ。」

男が何か唱え、魔方陣が猿の元に現れる。そして猿は、光となって消えた。

「次はアンタね。」

男は仕方ないといった表情で剣を抜いた。二本目だと?こいつは二刀流だったのか。

「ボルティジがやられるとはな、しかもこうもあっさりと。次はこうはいかないと言っている。」

「また返り討ちよ。あんなの出さないほうがマシよ。」

冷たく言い放った。

男は剣に魔力をこめた。後に抜いたほうの剣が紫色に光る。
剣を構える。

次の瞬間、剣がものすごい速さで伸びた。

8話 双剣

剣が伸びた。

「クッ！」

しゃがんで避ける。金髪が頭上でパラパラと舞った。

だが伸びた剣はうまく操れないらしい。だから猿を使ったのか。

後ろに下がったら不利だ。それに、伸びた剣は早くは戻らないらしい。ゆつくりもとの長さに戻っている。伸びる長さは自分で決められるのか？おそらくそうだろう。

左手に伸びる剣、右手には普通の帯電状態の剣。

なるほど、伸びる剣が戻る間、右手で時間を稼ぐ、か。

槍で剣が戻る前にと、素早く突きを繰り出す。だが、剣を駆使してすべてかわされる。

続いて、左手を前に出し、槍の尻で男の左側を大きく叩こうとする。男は隙だらけだといわんばかりの表情で左肩を突いてくる。

メアリーの狙いはそこだった。咄嗟に左肩ごと左手を引き、その勢いで右手を出す。左はから空きなのだ。

槍先の腹で、男を薙ごうとする。だが男はギリギリのところまで受け止め、右手の剣お一闪を繰り出す。槍の柄で防ぐが、体制を崩されてしまった。

まずい、これでは伸びる剣が！

「チッ！」

「喰らえ！」

「喰らわないわよ？」

メアリーは槍の柄で剣を受け止めた。切っ先を細い円柱で受け止めるのだ。ほぼ不可能に近い。だがメアリーはやってのけた。彼女の動体視力、反射神経、集中力には驚かされる。

「何だとお！？」

「あんたじゃ一生かかって私に攻撃を当てられないわ。」

「クソ・・・」

男の目が血走る。この女が！といった表情だ。

ハツタリに決まっているじゃないか。

私だって避けられない攻撃はある。ただ怒らせただったのだ。怒って、判断力を鈍らせる。それがメアリーの狙いだった。コイツはその類だろう。

案の定、引つかかった。

叫びながら剣を伸ばした。上に。そしてその剣を下に振り下ろした。なるほど、こういう使い方もあるのね。だが、叫びながらなんて誰も当たらない。

剣の先は砂に埋もれ、それでも雷を帯びているのがわかるほど輝いている。砂が黒くこげる。

馬鹿ね。メアリーは呆れる。誰でもわかるほどわざとらしく言ったがこつも簡単に引つかかるとは。笑いがこみ上げる。そこまでプライドが高いのだろうか。ガーディアの連中にもプライドはあるんだな。

男は我に返り、今起こした行動に対して後悔していた。本当に当たらなかった。畜生。

プライドも糞もない。本当の馬鹿だった。ごまかすためにああいう口調をしていたのか、馬鹿だからこそその口調か。それは分からない。

剣は相当伸びた。これを戻すには長い時間がかかるだろうとメアリーは確信した。

これで最後だ。と槍に魔力を再度流す。槍が細身になり、先が鋭くなった。

槍を持ち替え、右手で尻を、左手を先のほうに添える。投げる気だ。

狙いは腹。さつき傷つけたところだ。大丈夫、私なら寸分の狂いなく命中させられる。

感覚をとき澄まし、目を閉じる。

男はメアリーが目を閉じるのを見逃さなかった。

左手の剣を捨てて、一瞬で背後にまわろうとする。

メアリーの背後10メートルの地点にたどり着いた。足に力を入れた。メアリーはそのままだ。

今だ！グリフは猛スピードで近づく。

その瞬間、メアリーが振り向いた。

「！」

槍が投げられた。1mmもズレなかっただろう。男の腹を貫通した。

男は地面に倒れ、どくどくと流れる血を手で押さえ、メアリーに叫んだ。

「何故！気づかれていたというのか！」

「ええ、そうよ。最初から分かっていたわ。」

「心眼とか言うなよ!？」

「見てはいないけど、空気の流れのほうか人の位置を正確に把握できるからね。動き出しのときに、あなたがそこに着くことは分かっていたわ。」

「そんな、馬鹿な・・・」

メアリーは伸びる剣の元に近づき、拾った。すごく重い。よくこの剣を片手で支えていたものだと感じる。この剣のことが気になったメアリーは、男に聞いた。

「この剣、何か他の剣と違うわ。何なの？」

男の姿はなかった。やられた、とメアリーは唇を噛む。まあ、あんなのいつでも倒せると思ったメアリーは、まあいいかと開き直るのだった。

しかしこの剣、剣自体が生きているような錯覚に陥る。やはり何かおかしい。私は剣の事には詳しくないからな。帰ったらガイに聞くとしよう。

9話 親友

二人は戦い終わり、合流した。

「はあ、疲れたわ。扉のことといい、魔力枯渇状態よ。」
「何かスイマセン。」

遠まわしに俺に暴言言ってきた。

「なるほどね、魔力を流すことで体を硬化できる、ね。あのときの違和感はそれだったのか。」

「金属かは分かりませんがとにかく硬いです。」
「今できる？」

そういわれたので魔力を流してみる。しかし、硬化しなかった。

「スイマセン。何か無理みたいっす。」

「まあ、あなたが嘘つくとは思えないし、そのうち見せてもらっわ。」
「

はい。」

「それにしても、ケイファンなんて、どうやって倒したの？」

「硬化させて殴ったり蹴ったりしたら、再生しなくなりました。」

「なるほど、そういう効果もあるわけね。」

「師匠こそ、途中で2対1でしたけど。」

「あんなのハンデよ。それでも楽勝ね。4対1でも勝てたわ。」
マサヤは絶句した。化物か、と言いたくなかった。

「ところでマサヤ君、硬化させたとき、何か気づいたことはなかった？体が軽いとか。」

マサヤは思い出す、体がやけに軽くなってきたことを。

「いつもより格段に体が柔らかくなりましたね。」

メアリーは顔をしかめる。何なのよーと思っっているだろう。

「まあ、帰って硬化させれば、どんな物質からできているかも分かるわ。普通の物質じゃないかもね。」

「あと2時間ぐらいで着くわ。さっきの戦いで結構時間を使ったから、早くしないと日が暮れるわ。」

「暮れたらダメなんですか？」

前の世界では、別に暗くても外にいたが。

「ここには魔物がいるでしょう？」

ああ、そうか。と納得する。

街が見える。ミリシアより大きい。

「ここにフィアラルがあるんですね？」

「そうよ。あと30分ぐらいね。路地裏にあるから分かりにくいけど。」

街の中に入り、あたりを見渡した。ミリシアより広い。

10分程歩いて、大きな道路に出た。路地裏なんて無数にあった。これは面倒くさい。

「ここね。」

メアリーは迷う様子もなく路地裏に入っていた。

少し進むと風変わりのドアがあった。ここか。

マサヤが入ろうとしたとき、メアリーは隣の建物に入っていた。危なかった。

俺も急いで後を追う。

中に入った。割と明るい。ソファーがあり、それを挟むようにテーブルがある。ここで依頼人の話を聞くのだろう。キッチンがあるが、1週間前から放置してあるって感じである。

「結局ここは何屋さんということでしょうか。」

「ジャンルは様々よ。危険な植物の採集、強力な魔物の討伐、場合によっては暗殺なんかもあるわ。」

「暗殺??」

「ターゲットを殺してもいいだけの人間と判断した場合だね。滅多にないわ。浮気や暴力なんか暗殺の対象にはならない。悪徳者や悪い大臣なんかな。」

「誰も何も言わないんですか?」

「依頼人には黙るという条件付で暗殺するから大丈夫よ。」

ほんと、何でもありだな。

?「あつ、メアリーさん早かったね。もう終わり?」

「ええ、ガーディアのせいだけだね。」

・「ん、そこにいるのはじいさんの言ってた高校生。……………
昌也!!!!!!!!!!」

10話 再会

？「昌也！！！！！」

？の人物は尻餅をついている。
恐る恐る近づく・・・

「優斗！！」

尻餅はオーバーだが、親友との再会でそれどころではなかった。
優斗はいまだに起き上がれないでいる。
それでも

「待たせたな。」

「ああ、寂しかったぜ。」

昌也は優斗を起こした。

二人で感動している。メアリーはそれを優しく見守った。

「優斗、お前ここにいつ来た？」

「丁度1年半かな。ここはいいぞ？」

それから二人の思い出話が始まった。

・
・
・
・
・
・

そのころメアリーは

「じいさん？帰ったわ。」

「ああ、メアリーか。早いな。」

「ところで、例の少年。連れてきたわ。」

「おお！少年はどうした。」

「ユウトと話しています。」

「連れて来い。」

「いいけど、昔の親友と盛り上がっているのよ？」

「知るか！はじめに話すのは俺だろうが！連れてこいや〜！」

仕方ないわね・・・

「マサヤ？じいさんが呼んでいるわ。」

「あ、はい。すぐ行きます。じゃあ、後でな。」

「ああ、」

マサヤはそういい残し、じいさんのところへ向かった。

「あの〜スイマセン。」

「よし、正座。そこ。」

「え、あ、ハイ！」

いきなり?!

「私の名前はフォーレルニア・グウィルズ。マスターね。俺は見
の通りの年寄りだから、皆と同じようにじいさんと呼びな。」

「は、はい!どうも。」

「で、君の名前は?」

「岩元昌也です。」

「マサヤか・・・よろしくな!」

「はい!よろしくお願いします。」

「ところで、ユウトとは?」

「はい、ユウトが消えるまで親友でした。」

「なるほど、君にも、彼にも何か異質なものを感じたんだが、どうだ？」

「まだ完全じゃないですが、硬化できます。肌を。」

「面白い。今できるか？」

魔力を流した。温かいものが流れるのを感じる。だが硬化まではいかなかった。

「今は無理のようだな。また今度、じっくりみさせてもらう。それで、いつなったんだ？」

「砂漠でケイファンと戦ったときです。」

「ケイファン？いきなりそんなヤツと戦ったのか？！メアリーは何をしていたんだ！」

「ああ、師匠はガーディア？のメンバーと戦っていました。」

「ガーディアか・・・あとでメアリーに話を聞こう。それにしてもケイファンに勝ったのか。硬化には再生を無効化する効果もあるんだな。 ん？硬化の効果？ マサヤ、俺は天才なようだ。」

俺もそれ考えたんだけど。

「ユウトはどんな戦い方をするんですか？」

「まあ、それはそのうち分かるだろう。彼は珍しい属性を持っている。魔術のにの長けている。これほどの逸材をとらないわけがな

い。」

なるほど、昔からユウトは強かったもんな。

「では、全メンバーを集合させる。それから自己紹介な。」

ユウトによると、自己紹介は質問攻めにあつらしい。がんばろう

見ると、ソファアが3つに増え、1つの椅子がある。そこに俺が座るらしい。

7人？俺には6人に1匹に見える。

「失礼します。」

俺は椅子に腰掛けた。するとじいさんが

「では自己紹介〜」

パチパチパチ〜、皆やってる。ふざけてるのか。

「えっと、岩元昌也です。よろしくお願いします。」

「おきおき、それでは改めて俺はフォーレルニア・グウィルズ。よろしくな。次！」

「神埼優斗。ハイ！」

「メアリー・ティーフよ。ハイ次」

「ロイ・ベルデム。はいパス！」

「ライラ・パルキオプスよ。よろしく。次！」

「ガイ・ランドルフだ。ほい！次」

「イグナム。フェンリルだ。知恵はその馬鹿よりあるから安心しろ。」

ガイ「俺か！殺すぞ！」

イグナム「吼えてろ、馬鹿め。」

ガイ「吼えるのはお前の仕事だー！」

じいさん「やめろい、新人の前で無様だぞ。」

ガイ「うつせージジイ！」

じいさん「あ？今ジジイって言ったな！許されるのはじいさんまでだ！」

メアリー「やめなよ、じいさんもジジイも変わらないわよ。」

ライラ「そうよ。面倒くさい。」

ロイ「新人が固まってるじゃねえか。どうすんだよ。じいさん、さっさと進めろや。」

じいさん「お前らマスターへの口の利き方ぐらい・・・」

フォーレルニアはロイに抑えられていた。

メアリー「じゃあ代わりに私が進めるわ。1通り自己紹介は終わったわね。じゃあ、質問タイムね。皆、準備はいい？」

皆うなずく。じいさんとロイも戻っている。

メアリー「じゃあ、開始！」

全員手を挙げた。どうしよう。

じい「むっ、全員じゃな。まあいい、ここはマスターの俺か・・・」

「

メアリー「前の世界で彼女はいたの？」
いきなりやべええええ！

「え、えと、・・・いません。」

ライラ「うそー、かつこいいじゃんよ。」

俺は思わず下を向く。

メアリー「あははは！照れてる！」

ガイ「この中の男でいちばんかつこいいのは誰だ！！」
なんて質問だ。

男・・・ロイさん、ガイさん、じいさん、ユウトか、全員目が光っている。何でじいさんが光ってんだよ。ロイさんかな。

「ロイさんです。」

ロイ「おっしゃー！2連勝っ！」

どうやらユウトのときも勝ったらしい。

ガイ「あとで覚えとけよ？」

こっちを見ている。スイマセン。

次は、

ライラ「マサヤ君、メアリーと私どっちがいい？」

ふざけんな。俺に答えると？

二人とも20代の美女

メアリーさんは金髪のセミロング、身長は170ぐらい。D E力
ツプぐらい。

ライラさんは長髪の桜色の髪、身長は160ぐらい。C Eカップ
ぐらいである。

究極の選択である。まじめに考えていると、ユウトがこっちを見て
笑っている。他のメンバーもそうだ。爆笑している。

メアリー「冗談よw」

殺していいだろうか。

ロイ「男の中で、誰が一番強そうかな？」
これは

「ガイさんです。」

ロイ「俺のほうが強いのに！」
ガイ「寝言は寝て言えや！」

いつもだが、複雑な心境になる。

イグナム「次だ。剣、銃、どっちの方が好みか聞こう。」
「銃です。」

即答。だって強そうじゃん。

イグナム「だとよ、ロイ。」
ロイ「お前とは気が合いそうだが、今度勝負な。」
ガイ「卑怯にも程があるぜ。」

じいさん「糞ガキどもが、身の程を知れ！まあいい、最後の質問だ。
お前はここに来たことを後悔しているか？」

自身を持って言える

「はい。」

じいさん「よし、この少年をフィアラルへ迎え入れようじゃないか
！拍手」
パチパチ

ここで、俺の新しい生活が始まる。

その夜、
「なあ、ユウト。おまえもこんな感じで入ったのか？」

「ああ、最後の質問で、俺も、はい！って言ってフィアラルの1員になったんだ。」

「そうか、じゃあ改めて、これからよろしくな。」

「まあ、せいぜい俺に追いつけるようにな。ここでは俺が最弱だからな。」

「ならお前なんて楽勝だぜw」

「この野郎やってみろやw」

・
・
・
・

二人はその夜、遅くまで語り合った。

ギルドメンバー紹介

今回はフィアラルのメンバーを紹介します

ここでは位が高い順に載せます

名前：フォーレルニア・グウィルズ

年齢：65歳

身長：167cm

体重：57kg

説明：フィアラルの長。メンバーからはじいさんの愛称で親しまれている。最近、年齢のせいで思うように戦えないが、その点を差し引いてもメンバーの中では最強である。よくロイとコントをする。戦いに関しては、何かを極めているわけではないが、メンバーと同じ武器で戦ったとしても、同等に戦うほどの達人である。口は悪いが、メンバーのことを本当に愛している。

「死ねえ！！糞ガキ共がああ！！！」

名前：ロイ・ベルDEM

年齢：28歳

身長：184cm

体重：65kg

説明：銃の使い手。膨大な魔力量と属性を持つが、魔術にはあまり適していない。だが、使えるには使える。特別な銃は5つほどしかないが、ノーマルなものと合わせると数は計り知れない。かなりのコレクターで性能が低くても、プレミア品となればたとえ遠くても買いに行く。銃には魔力を弾として扱う。拳銃サイズのものから、

スナイパー用のものまである。じいさんとよくコントをする。どちらかというと、正々堂々ではない。全属性使えるが、ユウトの持つ特別な属性は使えない。

「お前らなんで銃のよさが分からねえんだよ!!」

名前：メアリー・ティーフ

年齢：25歳

身長：172cm

体重：0kg らしい

説明：マサヤをこの世界に連れてきた張本人。好物は肉だが、太っている様子はない。結構巨ny爆。槍を使い、普段は体術を使う。マサヤの師匠である。ここの料理はすべてメアリーが行う。肉が中心である。メンバーの中で唯一空間移動を使うことができる。属性は、火、水、土

「ライラ、肉食わないからすぐバテるのよ。」

名前：ガイ・ランドルフ

年齢：22歳

身長：181cm

体重：67kg

説明：剣の使い手。剣を二本所持しているが、本人は、あと二本ぐらい欲しいらしい。ロイのようにコレクターではないので、自分の気に入った剣しか持たない。とても好戦的な性格で、戦争のときは真っ先に駆けつける。師匠がいたが、すでにこの世にいない。属性は火、雷、氷、水

ライラ「何であんたこんなに属性あるのに魔術師になんかったの？」

ガイ「剣のほう楽しいじゃねえか！魔術だってちゃんと使っわ！」

名前：ライラ・パルキオプス

年齢：25歳

身長：165cm

体重：あなたよりは軽い

説明：メアリーとは同じ年で、同時にフィアラルに入った。属性が珍しく、量も多い。ただ、スタミナがないのが弱点。召喚獣を多数呼び出し、護衛させながら、自分は大型魔術を連発するという豪快な戦法をとる。短期決戦派である。長引いたら、召喚獣に適当に任せる。プロポーションを気にしているらしく、メアリーと違ってあまり肉は好まない。全属性使える。

ライラ「メアリー、ガイが私に変態なこと言ってくる〜。」

ガイ「何で静まり返ってる中で言っただよ！しかも言ってねえよ！」

名前：イグナム

年齢：248歳

身長：？

体重：？

説明：強力な魔物、フェンリルで、じいさんと決闘して負けたらしい。じいさんだけには敬語で話す。普段はペットだが、戦場では、フェンリルらしい、凶悪な無双ぶりを発揮する。属性は闇。他にも幻術を使う。

「じいさん。無理は禁物ですよ。お前らは存分に無茶をしろ。ん？あつ、頭撫でんな！」

名前：神埼優斗

年齢：17歳

身長：173cm

体重：57kg

説明：マサヤの同級生。マサヤより早く、このフィアラルに引き抜かれた。特別な属性を持っているというが、詳細は不明。

ゆ「マサヤ、あの店には可愛い子いっぱいいるぜ。」

ま「ナイスだ。今すぐ行こう！」

名前：岩元昌也

年齢：17歳

身長：175cm

体重：58kg

説明：この作品の主人公。神埼優斗の同級生。同じくフィアラルに引き抜かれる。まだ検証されておらず、確実ではないが、硬化ができるという性質を持つ。その異質で膨大な魔力にじいさんが気づき、メアリーにつれてくるように頼んだ。だが、魔力が多くても魔術に適してはいないということで、メアリーには体術を習い、これからも教えてもらう予定。属性は火、雷、氷、土

「なあ、ユウト。前のお前の彼女が新しい彼氏作ってたぞ？」

「！まじすか！！メアリーさん！殺したい人がいるんですけど前の世界・・・」

俺は口を押さえた。

11話

マサヤがフィアラルに加入してから1週間がたった。

マサヤは、その1週間、メアリーの指導を受けていた。

メアリーに組み手で勝ったことはなかったが。

だが、確実に腕は上がり、前みたいに一瞬でケリがつくようなことはなくなった。

「マサヤ、もつと腰低くしなきゃ、顎も引いて、足は肩幅！隙は見せちゃダメよ？」

「うう、1週間もたってるのに・・・」

「まだ硬化できないの？」

「ええ、確かにあの時なったんですけどね。」

「早く見たいわ、どんな物質に変わるのかしら。」

メアリーは宝石を見る気分だが、実際そんな綺麗なものではなく、色の濃い銅のようなものだ。そのうち変わるかもしれないが。

「おいマサヤ、どうだ？少しはできるようになったか？」

「あ、ガイさん。どうも、まだまだっすよ。」

そのときメアリーは何かを思い出したかのようにこの部屋を出て行

った。2人ともなんだろうと思ったが、メアリーが戻り、マサヤは納得し、ガイは驚いた顔をしていた。

「これ、何かしら。」

メアリーは、いつか戦った男の剣を差し出した。それを受け取ったガイの手は震えている。

「こ、これは……！魔剣……か？」

「「魔剣？」」

「ああ、魔剣というのは、良質な剣に魔物が住み着いたものだ。魔力が小さいもの、気が弱いものが触れるとそれだけで喰われる。」

「そんなすごい剣だったのね。あの男、なかなかやるのね。で、ガイ。この剣どうするの？」

「俺が使う。」

は？と2人とも口をあける。

「ちょうど雷にあった剣がなかったからな。これで戦略の幅が広がったぜ。」

「中の魔物は？」

「んと、んん、ボルティジ？」

メアリーは苦笑した。まさか剣から召喚してたなんて。

「ガイ、出せる？」

「今はダメだ。傷を負っている。今出せば死ぬかもしれない。」

「その傷、私がやったんだけどね。」

メアリーは申し訳なさそうにしていた。

「この剣何気に重いな。まあいい、じっくり観察しよう。」

「じゃあ、マサヤ。今日はもういいわ。自由にしていよ。」

「はい、ありがとうございます。」

ロイ「なあ、じいさん。」

じい「何だ？」

ロイ「クラウドから聞いたんだが、ジニアットが動き始めたみたいだ。」

じい「ほほう、あの兵士400人持ちの闇ギルドか？」

ロイ「ああ、そのギルドが、ハーピィを攻撃しようとしているらしい。」

じい「むむ、正ギルドのハーピイなんかじゃ太刀打ちできねえだろうな。」

ロイ「依頼があつたんだ。ハーピイのマスター、ブロッサムに。」

じい「内容は？」

ロイ「ジニアットを止めて欲しいとのことだ。」

じい「さすがハーピイだ。潰せじゃないんだな。」

ロイ「で、どうすんだじいさん。俺はいつでもいいぜ？」

じい「そうだな、ジニアットが動くまでどんだけあるか分かるか？」

ロイ「1週間つてところか？」

じい「なら、5日後に総攻撃だ。先にユウトを送って破壊工作をさせよう。」

ロイ「目標は？」

じい「ジニアットを4年間行動不能にすることだ。」

ロイ「ならば、マスター、幹部は確実に始末しましょう。」

じい「ああ、それと、ハーピイから援軍はもらえねえか？」

ロイ「その件ではもう話し合った。援軍は、マスターのブロッサム、

他ベスト3が来るらしい。それでいいか？」

じい「ああ、十分だろ。」

ロイ「じいさんは出るか？」

じい「ジニアットはそこまで強大ではない。お前から何とかしろ。」

ロイ「まあ、楽勝だが、最近ストレス溜まってんじゃ・・・」

じい「溜まりまくってるわ、ボケ。腰が動かねえんだよ。今度整体院行って来る。」

ロイ「そうか、じゃあ作戦は俺が決める。いいな？」

じい「ああ、勝手にしろ。」

12話 会議

ロイ「なら俺が作戦を決める。いいな。」

じい「ああ、勝手にしろ。」

ロイ「見てろよジジイ。俺が最強ってどこ見せてやる。」

じい「銃撃戦で俺にも勝てないくせに威張るなクソが。」

ロイ「腰がイタイタイなジジイに負けるか。」

じい「どうでもいいから、とつとガキ共集めて作戦の説明しろ。」

ロイ「あいさー」

〈会議〉

ロイ「ええー、まず敵はジニアット、味方はハーピイ。おk?」

皆コクリとつなずく。

ロイ「そしてジジイは腰痛wで行けません。じっとしてろよジジイ?」

じい「死ね！イケメンが！顔面潰すぞ！」

ロイ「あなたのような人間は私の半径1メートルに近づいただけで消滅します。」

じい「あああ！！腰い！さつさと動けえや！！」

2人は、10メートル以上離れた場所で会話していた。

ロイ「続きた、ハーピィからはマスターのブロッサム、他3人来るらしいが、まだ決まっていない。そのうち連絡する。5日後、ハーピィの連中を含め、ジニアットを攻撃する。4年間再起不能にすることが目的だ。マスター、幹部クラスは確実に始末する。」

メアリー「で、作戦は何なの？」

ロイ「ああ、ユウト。4日後にジニアットの基地に破壊工作してくれ。爆弾は全部で10個、変なところに隠すなよ。」

ユウト「分かりました。じゃあ、仕掛けるところは、トイレに爆弾を5つ分、倉庫に2つ、集会所に2つ、あとは管制室に1個ですね。」

ロイ「トイレはいい、他には、最上階に適当に1個、集会所にもう1個、残り3個は兵士格納庫だ。それでも兵士は全滅しないだろうが。」

ユウト「分かりました、4日後ですね。」

ロイ「ああ、頼む。それとマサヤ、お前の硬化とやらは使えそうだから、5日後までに何とか完璧に使いこなせるようになって欲しい。」

マサヤ「分かりました、がんばります。」

ロイ「それと、救いようのない馬鹿だが、何か剣増えたらしいな。使えるか？」

ガイ「まだだ。だがそれは住んでる魔物が弱ってるだけで、そのうち使えるようになる。」

救いようのない馬鹿に反応しなかった。自負してるのか？

ロイ「メアリー、約1週間、肉料理は少し抑えて、健康によい食事に変えるように、空いてる時間は自力で魔力をねってくれ。」

メアリー「・・・分かったわ。じゃあマサヤ、あなたもさっき言われたとおりに硬化を使いこなせるようにしなさい。」

マサヤ「心得たw」

ロイ「次、ライラだ、お前は肉食って、後はメアリーと同じだ。あと、サプリメント飲め。」

ライラ「うん、結構魔力使いそうだし。」

ロイ「イグナム、お前は何でもできるが、幻術を使って400人に及ぶ兵士に集団催眠をかける。そして、できるだけ動きを止める。」

イグナム「つまらんな。」

ロイ「文句言うな。この犬が、あそこに弾ぶつ放すぞ?!」

イグナム「俺も幹部とかとやりたいんだが、」

ロイ「前やらせてやったる?それもつまらない戦いだっただじゃないか。」

イグナム「チッ」

確かにそれはつまんねえだろうなwウズウズするって。

ロイ「イグナムを除いてこれは準備の段階だ。今から本戦の作戦を説明する。いいな。」

イグナム以外は頷く。

ロイ「ジニアットのマスターは俺とブロッサムが叩く。あとは適当に会ったやつとやれ。だが、幹部クラスの敵の数は分からない。皆、携帯は持っているな?誰かから何か聞き出せたら連絡を取れ、いいな?」

ガイ「ところでよお、ジニアットとハーピーって何なんだ?」

メアリー「ジニアットは闇ギルド。不正ギルドのことね。最近妙に調子乗ってるの。」

ライラ「ハーピーは、討伐よりも、採集や貿易が盛んなギルドよ。だけどマスターはそんな弱いギルドを守るために、毎回強いわ。ブ

ロツサムもちろん強いわ。」

ロイ「俺とブロツサムがやるんだ、マスターは安心しろ。問題はマサヤだ、お前は誰かについていけ。」

メアリー「そうね、じゃあまた私が受け持つわ。」

マサヤ「了解です。」

ロイ「それとユウト、お前はガイと行動しろ。剣が怪しいからな。もしものときは頼む。」

ユウト「はい。ですよ、ガイさん。」

ガイ「ああ、頼むぜ。」

ライラ「で、私は？」

ロイ「お前はハーピイの2人だ。あと一人はイグナムの手伝いだ。ハーピイは回復系統が多い。ブロツサムは超攻撃型だがな。そいつらなら魔力回復も行ってくれるだろう。」

ライラ「分かったわ。それなら安心ね。」

イグナム「いらねえし、人間なんて。」

拗ねている。ロイは無視する。

ロイ「これで一通り終わったな。もう1度言う、作戦決行は5日後。ユウトは4日後ジニアットに破壊工作をする。ガイとユウト、マサ

ヤとメアリー、ライラとハーピィ2人、イグナムと残りのハーピィ、俺とブロッサムで行動する。ハーピィのメンバーは後日連絡する。以上だ。何か質問は？」

ロイ「ないようだな。さすがは俺の完璧な説明。それじゃ解散。」

皆はそれぞれの課題にとりかかった。

作戦決行まで5日

13話 ハーピーメンバー

ジニアットを攻撃する作戦の会議から3日目だ。

ユウトは明日に作戦を開始するので念入りにイメージトレーニングをしていた。

そんな中

ロイ「おい、お前ら、集合だ。ハーピーの連中が来たぞ。」

ガチャリとドアが開き、入ってきたのは4人の女性。1人だけ特に美しい。

ロイ「聞こえねえのか？集合。」

皆ダラダラと集まる。

ロイは、ハーピーの人たちに謝っている。気を悪くしないでくれ、と言っている様だ。

皆は、そんなロイを見るのが楽しいのだろう。

ロイ「はい、じゃあ我々がジニアットを攻撃するにあたり、ハーピーから援軍が来ることは説明していた筈だ。それで、4人に来ていただいた。すみません、自己紹介お願いします」

ブロッサム「ええ、もちろん。私はブロッサム、ハーピーのマスターよ。久しぶりに戦えるわ。皆三つよろしくお願いします。」

マサヤ（ハーピーのマスターが好戦的って・・・）

シュバリエ「私はシュバリエ、今回はライラさんと一緒に行動させていただきます。どうぞよろしく。」

リップ「リップです。私も同じくライラさんのサポートをさせていただきます。よろしくお願いします。」

二人が深々と頭を下げたので、ライラも会釈する。会釈かよ。

サファイア「サファイアです。今回はイグナムさん・・・アレ？」

イグナム「ここだが？」

サファイア「ああっ！スイマセン！でも、ちゃんと役に立ちます！」

イグナム「・・・」

また拗ねた。メアリーが頭を撫でると怒り出す。

ロイ「サファイアはイグナムと相性のよい魔術を使っただつたな。お前も幻術か？」

サファイア「いえ、私は幻術は使えませんが、幻術を具現化することができます。つまり、イグナムさんが誰かにドラゴンに襲われているという暗示をかけます。そうすれば、私はその人からイメージを汲み取り、ドラゴンを召喚します。しかい、長くは顕現してられません。10秒が限界です。」

ロイ「だそうだ、イグナム。」

イグナム「少しはやるようだな。足手まといにはなるなよ。」

サファイア「はいっ!」

ガイ「なあ、ロイ、ブロッサムってヤツ滅茶苦茶強いんだろ? ほんとかよ?」

ロイ「メアリー、魔力はどのくらい元に戻ったんだ?」

メアリー「やっと半分ね、まああと1日でほぼ全快よ。」

ガイ「あの、ロイさん?」

ロイ「ライラは?」

ライラ「私はもう十分よ。今からでもいけるわ。」

ロイ「ならよかった。」

ガイ「ねえ、ロイさん? きいてm・・・」

ロイ「シュバリエ、リップ、お前たちはライラの魔力が常に全快であるようにさせてくれ。」

2人「分かりました」

ガイ「ねえ、r・・・」

ロイ「ブロッサムさん、あなたは私と行動です。よろしいですか?」

ブロッサム「ええ、がんばりましょう。」

ガイ「コラアアアアアアアア！！！この
人の話ぐらい聞いてやれよ！！！」

野郎！人ー

自分のことかよwとマサヤは思った。

ロイ「マサヤ、どうだ？硬化はモノにできたか？」

マサヤ「ええ、2回に1回は成功します。」

ロイ「そうか、じゃあ依頼が終わったら披露だな。そのときに他の奴らのも見せてやる。あれ？ガイ、どうしたんだ？そんなに疲れ切
つて。」

ガイ「何でもあらへんよ・・・」

投げやりになっている。しかもなぜか話し方も変わっている。

ロイ「ユウト、準備はいいか？」

ユウト「はい、いつでもいけます。」

「ではブロッサムさん、作戦は明後日です。明後日の早朝、ここに
もう1度お集まりになってください。」

ブロッサム「分かったわ。」

ロイ「では、これで決定です。また明後日会いましょう。」

ハーピイの人たちはドアを開けて帰っていった。

ロイ「これはチャンスだ。俺としても、じいさんにしても。ハーピイとは友好を築きたい。ミスは許されない。いいな？」

14話 ユウトの先攻

4日目、朝3時、ユウトは起きた。

「いよいよだな……。うまくいってくれよ?」

ユウトは自分の手を握り締める。

「行くか。ロイさんが地図を確かココに……。あつた。」

東に10キロ、以外と近い。

「今回も頼むぜ?ヴェステアーロン!」

大型の鷹のような獣が現れた。全体的に色が暗い。ユウトの1・5倍くらいの身長がある。

「お、ユウトじゃねえか。2ヶ月ぶりか?久しぶりだな。」

「ああ、今回はジニアットに行く。東南東に約10キロだ。」

「任せな、乗れ、早く行くぞ。」

「ああ、頼む。」

ヴェステアーロンは巨大な翼をはためかせる。風圧がものすごく、家も吹き飛ばしそうだ。背中にユウトを乗せたヴェステアーロンはジニアットを目指して飛び立った。

ロイ「ユウトは行ったな。よしよし、任せたぞ。」

メアリー「あの子の能力はほんとに使えるわね。私も欲しいわ。」

マサヤ「ユウトはどんなことができますか？」

ロイ「ん？あ、そうか。ユウトはね、聞いたことない属性だが、影属性というものを使うことができるんだ。影属性というのも、俺らがつけたんだけどな。能力は、影を伸ばしたり、実体化させたりなどどれも強力極まりない。それを見つけるじいさんの目も脱帽だよ。あれは100万人に1人の逸材だ。」

なんか巨人的なこといつてる。

マサヤ「そうなんですか。でも影って・・・」

SIDEユウト

森の上を飛んでいるが、まだジニアットらしきものは見あたらない。

「なあ、間に合うか？あと少しで朝だぞ？」

「ああ、ぴったりだ。お前は影が無いとダメだからな。朝になった瞬間にちゃちゃつとやんなきゃな。」

「あんまり遅いと気づかれるからな。」

森を越えると、黒い建物が目に入った。デカイなんじゃありや、爆弾10個で足りるか？まあ、ロイさん特製だから侮っちゃいけないだろうけど。それにしてもこんな握り拳くらいのちゃっちい爆弾がねえ……。

「ユウト、あれじゃねえか？」

「ああ、想像以上にでかいな。最上階は何回だ？7階か？兵士格納庫も馬鹿でかいぞ。」

「はい到着。」

「ありがとな。ヴェステアローン。どっか隠れててくれ。」

SIDEマサヤ

「うっうっうっ」

手が光った！まだだ。確実に上達している。にしても硬いな。神経通ってんのか？

明日までになんとか完成せねば……。うまくいけばいいけど。

SIDEユウト

ここか、真っ黒だ、しかも結界が張ってある。なるほど、誰にも気づかれないわけだ。ロイさんはどうやったんだろ。あ、じいさんか。

爆弾を鞆から取り出し、地面に並べる。あと少しで陽が出る。・・・
出た！

「ブラックミスト」

影が霧散し、爆弾を包む、真っ黒に染まった爆弾は宙に浮いた。

「ゴー」

爆弾が一斉に飛び立った。1つは頂上、倉庫に2個、集会所に3つ、管制室らしき部屋に1つ、残りは兵士格納庫へ、それぞれ飛んでいた。

ユウトは目を閉じ、爆弾に意識を憑依させた。

真っ暗だな、影も少しスピードが落ちてる。だが、これくらい暗いほうが見つからない。兵士格納庫か、中も広いな。でもイグナムなら楽勝だろう。かわいそうに。3つか、やっぱトイレに1つしかけよう。誰か丁度よくいるだろう。あとは朝食を食べる食堂、天井でいいな。管制室、誰もいないが、油断はできない、慎重に壁を伝い、いすの下に仕掛ける。倉庫はもう仕掛けた。集会所、1人がこっち向いた！まずい、俺は爆弾で男を殴った（ユウトは外にいる）。男は倒れた。ダメだ、やりたくはなかったが殺すしかない。爆弾を包む影の1部を尖らせる。不安定になるが仕方ない。勢いよく男の胸を貫く。男は苦しみ、息絶えたようだ。やってしまった。男の胸からは血が噴出し、床を染める。すまない、本当は明日の予定だったけど。いやあ、血が垂れてるな。仕方ない、この上にするか。上の目立たないところに爆弾を仕掛ける。あとは台所と掲示板の裏だ。あとひとつ、最上階に仕掛けた。柱が脆そうなところに。一気に崩れてくれよ？

ユウトは意識を戻した

「ふう、一人やっちゃったか。しょうがねえな。それにしても、もう何の罪悪感も残らねえな。俺も変わったな。」

「ヴェステアーン、帰るぞ？」

「終わったようだな。ああ、帰ろつ。」

ヴェステアーンは、俺が影属性をモノにしたときに現れた俺の召喚獣だ。

「完璧とまではいえねえが成功だ。」

ユウトはヴェステアーンの背中に乗り、飛び立った。フィアラルに向けて。

SIDEマサヤ

「で、できた・・・！」

マサヤの腕は輝いていた。

15話 出撃準備

SIDEマサヤ

「できた・・・！」

マサヤの腕は光沢感が出て、いかにも硬そうだ。
メアリーは近くにいたので、すぐに気がついた。

「！ やったわね、いつもと光り方が全然違うわ。これなら
明日は大丈夫そうね。」

メアリーはそういい、ロイの元へ向かった。

やった、ついに硬化をものにした。これは本当に硬い。普通の人間
じゃ、1パック殴っただけで意識が飛ぶだろう。なんせ、ドリルま
で耐えるのだから。

ロイ「ほう、これが硬化か。確かに硬そうだ。だが・・・ほい！」

腕の一部が簡単に崩れた。崩れたと言ってもほんの×2少しだが。

ロイ「はっはっは！魔力には強くないんだな！ちょっと待ってろ。
すぐ鑑定してやる。」

マサヤの腕の一部はロイに持ってかれた。硬化を戻すと、そこは擦
り傷みたいになっていた。血も出てきたし、だんだんと痛みを感じ
てくる。え？硬化って大したことない？いやいや、そんなことはな
い・・・よね？

まあ、でもこれで格闘技を有利に進められる。

ロイ「マサヤ、俺はこんな物質見たことねえ。金属だが、金属ではあり得ないような強度を持ち、それなのに魔力装甲がなく、また張ることもできない金属なんて。」

とことん魔術はダメみたいだな。

ロイ「おい！ガイ！ちよつと来い！頼みがある。こいつの腕を剣で叩き落としてくれ。魔力はなしだ。」

ガイ「！？いいのか？」

マサヤは嫌そうに頷く。だって痛いもん。斬れないことは分かっているけど、衝撃は多少軽減されるが、無いわけじゃない。まへのドリル攻撃ではそんな感覚だった。

ガイ「斬れても悪く思っなよ。ラアッ！！」

ガキイイイン！

マサヤ「痛ってー！！」

腕に外傷は無いが、確かに痛そうだ。皆は苦い顔をしている。

これ、やっぱり使えんじゃねえ？しかも、まだなんかある気がする。

SIDEユウト

あと30分くらいか．．．今回は1人殺ってしまったが、前は7人だからいいほうだろう。バレなきゃいいが。まあ、トイレは見破られないだろう。ちなみに、あの爆弾は、人間が触れると爆発する。

また、ロイさんの合図でも爆発するようになってる。誰かが、何だこれ。と手にした瞬間あぼんだ。

さらに、一つ爆発すると全部爆発する。名にも出来ずに見てるしか出来ないだろうな。

予定では、今日中に爆弾が作動する。あくまでも人間が触れたら爆発だから、獣や魔物が触れたって爆発しない。まあ、処理する方法はない。ロイさんが来いと言ったらくる爆弾だからだ、解散は出来ないらしいけど。

SIDEマサヤ

ロイ「くっ！ダメだ。魔力装甲が全くかからない。ある意味これダメじゃね？」

マサヤ「え、でも自分から魔力は流せますよ？」

ロイ「だが装甲は作れないじゃないか。つまり、魔術が弱点という事だ。」

この世界でこんな能力・・・何か、魔力無限とか、超珍しい属性がたくさん使えるとか、がよかったなあ。

まあ、金属もかっこいいよな笑

ロイ「だけどそれも特別なんだぞ？俺はそんなの見た事無いからな。ちゃんとした利用法を考えろよ。」

特別？俺の厨二病がドクンと脈打った。ちゃんと奥義とか作ろうw

ジニアットにて

「はあ、ここの訓練意味わかんねえよ。」

ジニアットのある兵士らしき人が愚痴を言いながら、なんとさつき爆弾を仕掛けたトイレへと入って行った。

「ふんにゆうう！ああ出た。ふう、もうここの兵士やめようかな、面倒だし。マスターは俺らの事どう思ってたんだろ。」

どうやらウンコマンだった。

「えっと、ケツ拭いて、流す．．アレ？なんだこれ、ん？」

ウンコマンは、近くににいる友人を呼びに行った。

到着したウンコマンズはその爆弾らしきものをマジマジと見つめた。はたして、触ってもいいだろうか。すると、ウンコマンズAが誰か持ってみて、と言う。ウンコマンズA B C D Eは皆顔を見合わせ、首を振る。先程ウンコマンになったCが、仕方ねえなど、手を伸ばす。それをウンコマンズはマジマジと見つめる。トイレの中で、ウンコマンズが5人。しかも糞を処理するように、爆弾らしきものを処分する。なんと滑稽だ。

C「じゃあ行くぞ、．．．よっと。う、うわあああ。」

ドカアアアアン？

A B C D E「うおあああ！？」

ウンコマンズは

その爆発をもろに食らったので当然木っ端微塵になった。

同じく、他の場所でも爆発が起こった。

マスター「いよいよ攻めてくるのか。でもここまでしなくても。泣」

SIDEユウト

あ、早え、もう爆発してやがる。

「ヴェステ、爆発したみたいだ。」

「え、早。どんだけだよ。大したことねえじゃん。」

「いや、それだけじゃ分からねえだろ。どっかのバカな集団がやっ
たんじゃないの？でもあれが爆発したなら100人は死んだよな。」

トイレかなー、

トイレかなー、ワクワク

「着いたぞー」

「ああ、ありがとうな。」

ユウト「ロイさん、終わりましたよ。ユウト君帰りましたよ。」

ロイ「ああ、つか何だお前その口調は。」

ユウト「爆弾は既に爆発しました。」

ロイ「そうか、じゃあお前は寝ろ。」

ジニアット攻撃まで

1日

16話 出撃

作戦決行日、朝4時

ロイ「起きたか？皆。」

皆格好がいつもと違う。

ロイさんは、青色のマントを羽織り、腰には3丁の銃。背中には銀色のボディに銃口にバレルのようなものを取り付けたショットガンを背負っている。腰の3丁の銃は、よく見えないが、異様なものを感じる。おそらくこれらが、霊獣、魔銃と呼ばれるのだろう。

メアリーさんは既にエルダージャベリンを出現させている。
その他、準備可能なようだ。

ライラ「あとはハーピイの人たちだけね。」

ライラさんは、桜色の髪を、ポニーテールにしている。

メアリーさんといい、ライラさんといい、タイプは真逆だけど美すぎる。

ブロッサム「入るわよ」

ロイ「来ましたか。もう私たちは準備が整っていますが、貴方たちはもう出発してもよろしいでしょうか。」

ブロッサム「ええ、行きましょう。」

各々外に出る。

ロイ「じゃあブロッサムさん、何か鳥獣型の魔物や精霊は召喚できますか？」

ブロッサム「ええ、当たり前よ。私たちはそれに乗るわ。クライン！」

雷を纏ったフクロウが現れた。頭にはズレているが冠をかぶり、首や尾には装飾が施され、背中にはジェットコースターにあるようないすが並んである。2メートルほどの大きさで、薄い緑色をしたフクロウは4人を乗せた。

ロイ「ハーピーは大丈夫なようだな。それにしてもすごいな。あの大きさのフクロウを召喚するなんて。」

ガイ「どうでもいいから早く出してくれよ。」

ロイ「ああ、そうしよう。ユウト、何人いける？」

ユウト「4人ですね。」

ロイ「分かった、じゃあユウトにはマサヤ、メアリー、ライラが付いていけ。」

ロイ「残りは俺について来い。頼むぜ、麒麟」

魔方阵から馬より少し大きいくらいの首の長くないユニコーンが現れた。足からは赤い炎を出し、尻尾はもはや炎だ。全身が赤い麒麟

は2人と1匹を乗せた。

ロイ「じゃあな、じいさん」

3匹の召喚獣は飛び立った。

メアリー「着いたわね」

そこには、見るも無惨な黒い建物、ところどころ大穴があいていて、
たまに赤が見える。血だろう。

ユウト「おわゝ、スゲ」

ロイ「ここからは前言った組で行動してもらおう。いいな？誰一人として欠けてはならないのがフィアルだ。ハーピィを守るとともに、

生きて帰って来い。まだ16話なんだぞ。」

マサヤ「16話?」

ロイ「解散」

sideイグナム・サファイア

さ「すごい数の死体ですね。」

い「あの爆弾は強力だからな。作戦を始めよう。」

イグナムは普段の子犬サイズから一気に大きくなり、背中が人間の頭ぐらいの高さまでになった。サファイアは呆然としている。

い「ダーク・ゾーンを張る、その間にお前は片っ端から具現化させてくれ。中身は死神だ。」

さ「死神ですね。まあ言ってくれなくてもよかったですけど、こっちのほうがイメージを掴みやすいです。」

い「準備ができたようだな。ダークゾーン!」

イグナムを中心として、薄黒い波が広がっていく。それに触れたものたちは、いきなり何かを見つけたようにビクツとなり怯えるようにして後ずさる。

さ「かかりましたね。夢幻地獄。」

サファイアの表情が変わった。あんなに明るい顔をしていたのに、沈みきった顔をして、目が濁っている。

イグナムはサファイアの魔術に驚いていた。自分の想像していた死神がそのまま現れたのだから。骸骨に黒いマント、鎌を持つものもいれば、銃を持っていたり、杖もいる。すごい、これがサファイアの魔術か。想像以上だ。

「さ「イグナムさん、多分、この人たち皆死にます。弱すぎますって。」

side ガイ、ユウト

ガイ「つまんねえな。どいつもこいつも、雑魚過ぎるぜ」

ユウト「そうですね。何かどでかいの来ませんかね。」

ズガアアアアン!!!!!!

「「!!!!!!」」

壁が突然爆発し、その中から、3頭の魔物が現れた。その後ろには、人間。

「へへ、俺らのギルドをこんなにしゃがって、殺すからな。」

楽しそうに嗤う身長150センチくらいの科学者らしき人物が現れた。

ガイ「俺らも退屈してたんだよ。」

ユウト「来ましたね、ほんとに、」

この2人も楽しそうだ。

魔物が3体。赤、青、黄色の鬼だ。角がそれぞれ2本ずつついていて、目が光っている。赤は棍棒、青は剣、黄色は弓を持っている。しかも身長がガイの2倍くらいある。

「私の名前は、サウスタ・アリッジ。このギルドの最高科学者です。そして、第2部隊隊長でもあります。うへへ」

ガイ「鬼が、強そうだな。ちょっとだけ」

ユウト「いや、もっとちょっとじゃないですか？」

サウスタ「君たち、誰が3体といいました？奥をご覧ください。」

「！！！！」

奥には鬼が約30体。その奥には一番デカイ黒鬼がいる。

ユウト「これだけ多くの鬼を従えるって、お前・・・何者だ？」

サウスタ「全部私が改造しました。まあ、なに言ってるか分かりま

せんよね。」

ガイ「改造くらい分かるって。」

sideロイ、ブロッサム

2人は所長室へと向かっている。そんな時、

「ちょっと待ちなあ、いい感じのお二人さん！」

ブロッサム「誰？殺すわよ？」

「おおく怖え、俺の名前はボシキ・リヤン。第4部隊の隊長だあ。」

赤く短い髪に、ヤンキーみたいな口調で話しかけてくる男。30歳くらいだろうか。いい歳こいて、何やってんだか。

ブロッサム「ボシキね、私が殺るわ。ロイさん、あなたはマスターを狙って。」

ロイ「ああ、貴方なら楽勝ですよ。では、任せましたよ。」

そう言い残し、走って去っていった。

ブロッサム「行ったわね。これで私もちゃんと力が出せるわ。覚悟しなさい？」

sideイグナム、サファイア

い「おい、今なんて言った？」

さ「だから、全員死にます。」

こんな性格だったのか？あの魔術を使ってから何かおかしい。どう
いうことだ？

さ「こんな弱いやつと戦うために私は人間のところに来たんじゃないわ。
い。もっと強いやつと・・・もっと・・・足りないわ。」

・・・今、何ていったんだ？

17話 乱戦(1)

今、何ていったんだ？

人間？弱い？もつと強いやつ？

・・・！！

もしかして、人間・・・ではない？

い「お前っ！何者だ！」

さ「あははは、弱いわ。ハーピーには強いマスターがいるから入ったものの、マスター以外超平和主義者でさー、」

い「だから、お前は何なんだ。」

さ「ああ、あたし？あたしはサフィリア・シム・グラフィ。」

い「それが本当の名前か、それと、正体を見せろ。」

さ「ええ？あたしと戦ってくれる？」

い「何を言っただ。今は仲間だ。そんなことはできない。」

さ「へえ、じゃあ・・・」

サフィアことサフィリアが腰から剣を取り出す。そして超人的なスピードで近寄ってきた。

い「何!？」

side ガイ、ユウト

ユウト「いや、でもいけんじゃないっすか？」

ガイ「まあ、そうだな。たかが鬼だもんな。」

2人は落ち着いているが、頭はフル回転している。さすがに30体近くを相手にするのは厳しいようだ。

サウスタ「あの、いいですか？」

ガイ「あつ、すいやせん。どうぞ？」

サウスタ「はい、じゃあ続き。行けええ!! 鬼軍団!! その2人を蹴散らすんだ」

鬼たちは一斉に動き出した。ユウトとガイは構える。

赤鬼がユウトに向かって走り、棍棒を振り上げる。ユウトは右に飛んで避けた。さらに、黄鬼が放った矢が飛んできく。ユウトは舌打ちし、極太の矢を転げてかわす。そして起き上がるとともに赤鬼に接近し、

「シャドウウェポン・ソード!」

ユウトの背後に灰色の剣が4本出現する。そして、赤鬼の左足に飛んでいく。

そのすべてが刺さり、血が噴き出す。鬼は悲鳴をあげて倒れた。続いて、ユウトは黄鬼に向かって

「シャドウウェポン・アーム！」

影が拳の周りを包む。左手で右手首をつかみ、右手をパーにする。そして右手を黄鬼の腹に向ける。黄鬼がユウトを蹴ろうとした瞬間、ユウトは左手に力をこめる。すると、右の手のひらから黒い炎の弾を発射した。ダン、ダン、ダンと命中し、鬼の腹に穴を開けた。血が噴き出す中、機械がチラッと見えた。

「ほんとに改造されてんだな。」

ガイは、青鬼2体を相手にしていた。

ガイ「この霊剣ウォールニアはそんな軽い剣じゃ、刃こぼれひとつしないぜ！」

水色の光る剣が、青鬼の剣を受け止め、弾く。ガイは、かかってこいよ。と挑発している。青鬼は2匹同時に上と下に斬撃を繰り出した。ガイはしゃがみながら跳び、下の刃に乗った。そして、そのまま剣とともに上空に上った。一番上にたったところで青鬼の顔面に飛び移る。もう1方の青鬼がガイに向かって剣を振り下ろす。ガイは笑ってもう1方の青鬼に飛び移る。だが、剣はとめられるはずもなく、青鬼の顔面を真っ二つにする。脳のところは完全に機械だった。ひでえことしゃがるぜ。ガイは剣を青鬼の頭に突き刺した。返り血を浴びたガイは、きったねえ、と汗をぬぐうように腕で額を拭く。

「おい、チビ！なんでこんなことしたんだ！鬼たちにも人生・・・いや鬼生つつうものがあるだろ！」

サウスタは聞こえているのか聞こえていないのかまったく動じない。赤鬼と青鬼が同時に襲ってきた。剣を一振りすると赤鬼の拳が切断され、手首から先がなくなった。右手で左手首を押さえて蹲っている。青鬼はその隙に背後へ回り、剣で突きを思い切り繰り出す。ガイはそれを紙一重でかわし、懐へ潜り込んだ。剣を突きの構えに変えて、上を見る。青鬼のデカイ顔がガイを見下している。

「ブルー・アクエリアス」

剣が大量の水を纏い、その水が細く鋭くなるように変形し、ランスのようになった。

「スピア・アクアウェイブ！」

剣は青鬼の顔面を正確に突いた。

ユウトは、赤鬼と黄鬼×2を相手にしている。

「シャドウエポン、ソード！」

今度は前に6本の剣が出現し、サークル状になった。そして、黄鬼から飛んでくる矢を防ぎきったところで、左手で右手首をつかみ、右腕を前に出す。すると、剣は1本ずつ鬼に向けて飛んでいった。

「はあ、何か、改造鬼ってやる気が・・・」

つまらなそうに1体ずつ片付けていくガイとユウトであったが、ユ

ウトは黄鬼に飛び乗ったところで、黄鬼の頭から何か聞こえた。

ピピピピピピピピピ

ピーピー

ピーーーーーー

黄鬼の顔が膨らみ、爆発した。

「うつつ！シャドウウェポン・ダークバリアー！」

ユウトの前に黒いバリアが発生し、爆風を防いだ。なんだこいつ等。自爆までするって言うのか。それとも、サウスタがやってるだけか。黒鬼はどこか悲しい目をしている。

すると、黒鬼が何かふっきれたように立ち上がり、拳を振り上げた。そして振り落とした。

サウスタに向かって

s a d e イグナム、サフィリア

「あはは、いいわ、久しぶりだね。この感覚！」

「お前、その姿・・・魔人だったのか！！！」

「ええ、そうよ。正確には魔女ね。さあ、ちゃんと殺す気で来てよ

「?じゃないと・・・死んじゃうよ?」

サフィアは不適に嗤い、剣を捨てる。

「せっかくだから、あなたとは魔術で勝負したいわ。」

「いいのか、私はフェンリルだぞ?」

「だから殺す気であっていつてるでしょ?」

サフィアは息を吸い込み、落ち着いた表情に戻った。そして

「ヘルブレス!」

口から黒いブレスが発射される。イグナムは

「チッ、ブラックミスト」

暗い霧が立ち込め、サフィアは一瞬戸惑う。なんせ彼女には、イグナムに囲まれているように見えるからだ。これは、幻術。わたしに、こんなもの・・・?解除できないだど?

「どうだ?解除できないだろう?最初からおかしいと思っていったんだ。なぜ俺につく必要があった、なぜ人間にはありえないような魔法が使えた?それは、お前が人間じゃないからだ。だから私はこの魔術を対人用から対魔用に調整したんだ。どうだ?わかったか?」

「くう、あたしだって魔女よ、甘く見ないでよ。スパイラル・ダス・エフェクトオ!!!!」

暗い霧が一瞬にして晴れた。

「夢幻地獄!!」

イグナムの前に、3対の死神・・・

sideロイ

ブロッサムさん、頼みましたよ。

それと、イグナムは始まったかな。ブロッサムさんが、彼女は魔人だということを教えてくれなかったら今頃イグナムは・・・。ロイは携帯電話を取り出し、メアリーにかける。

め「あつ、ロイからだわ。どうしたの?」

ろ「ああ、敵と遭遇しなかったか?」

め「ええ、今は。何で?」

ろ「お前らの近くに異様な魔力を感じる。」

め「ええ、気づいてるわ。だけど大丈夫よ。」

ろ「そうか、それならよかった。気をつけるよ。」

でけえ魔力だなあ。メアリー、マサヤ、大丈夫か?ま、マスターのほうに危険だろうが。

つか、早く誰かと殺りあいてえんだけど・・・

サウスタ軍団が何やら唱え、1人のサウスタがユウトに向かって飛び出した。ユウトは不意をつかれ、急接近を許してしまった。そしてサウスタの脛が、腹に直撃する。

ユウトはそのまま10メートル程吹っ飛んだ。

そこに、黄鬼の放った極太の矢が3本飛んでくる。矢は阻止されることなくユウトの元までたどり着いた。

ガイ「ユウトー！ー！」

ドカアアアン

ユウトはシャドウウエポン・バリアを発動し、なんとかその攻撃をしのいだ。だが、矢先はバリアを貫き、ユウトの眼前で静止していた。

ユウト「ヒィー、あぶねえ。そろそろ本気で行くぜ。シャドウウエポン・アームズ・ゲート！！」

ユウトの背後に3メートルくらいの門が現れた。門が開くと、大量の矢が飛び出した。

鬼軍団は耐えられるはずもなく、大多数が全身に魔力の矢を浴び、死滅した。

サウスタ軍団は、ひよいひよいと右へ左へ飛んで避けまくっている。門が閉じたとき、残っていたのはユウト、ガイ、サウスタ6人、黒鬼、鬼8体だ。

サウスタ「ほれほれ、剣士さんやい。よそ見しないでね。」

ガイはサウスタに胸ぐらをつかまれ、サウスタ4人のほうへ思い切

り投げ飛ばされた。

ユウト「ガイさん!!」

ユウトは鬼に阻まれてガイを助けることができない。

サウスタ「……来ましたね。デストラクション・サークル……」

4人のサウスタの中央には魔方阵。ガイはそこに落下した。その途端、魔方阵が光を放った。

サウスタ「……魔方阵よ、目標はこの男です。……」

魔方阵が呼応するように、点滅すると、光の柱が魔方阵から出現し、ガイを包み込んだ。

ガイ「うあああああああああ!!」

ユウトは鬼を潜り抜けようとしたが、やはり抜けない。ガイさん・

・

すると、黒鬼が動いた。4人のサウスタに向かって走り出した。サウスタは3人は気づいたが、背後から走ってこられてきているサウスタは気づかない。そして黒鬼の足で、サウスタを踏み潰した。魔方阵が不安定な形になり、光の柱は消滅した。ガイはとろどろに切り傷ができていた。サウスタは一旦合流した。

ガイ「お前……今、もしかして……」

黒鬼はガイを睨みつける。お前も同じだと言ってやるようだ。

ガイ「すまねえな。お前の子分をあんなにしちまって、だけど今は共闘しかない。あの鬼たちも、もう・・・」

黒鬼は、サウスタ達を見て、ガイに視線を戻した。合意してくれたようだ。

ユウトは鬼たちと相手をしていて、あることに気がついた。そしてそれは極めて単純であった。

耳に無線機がついている。

ユウト「シャドウウェポン・ランス」

ユウトは若干呆れつつも耳の無線機を破壊する。すると鬼は我に返る。そして周りのおびただしい数の鬼の死体を見て、呆然としている。

残りの4体の無線機も壊す。赤、赤、青、黄、黄は正氣に戻る。

ユウトは内容を簡潔に話し、他の鬼を救えなくてすまないと謝る。鬼は全員泣いていた。

ユウト「倒すべきは、あそこのチビ科学者だ！」

鬼は立ち上がった。みんな涙を拭き、ユウトの後に続く。

黒鬼は、2人のサウスタを相手にしていた。さっきまでは不意打ちをしたから攻撃がヒットしたが、今回は掠りもしない。

「サウスタ・メディカル・ホーミングブラスト！」

サウスタからカプセルが2発飛んできた。黒鬼は避けるが、追尾してくる。黒鬼はカプセルを掴んだ。そして、サウスタに投げつける。サウスタは手をかざした。すると、ミサイルはまた照準を合わせなおした。黒鬼は体制を崩されたままだ。黒鬼は死を覚悟した。

ドカアアアアアアアアン！

黒鬼は目を開けた。すると赤鬼と青鬼がミサイルを殴り飛ばしていた。黒鬼は驚きを隠せない。

赤鬼と青鬼は涙を浮かべながら黒鬼のほうに振り向き、ニツと笑った。

黒鬼も泣きながら笑いかえた。

ガイも2体のサウスタと戦っていた。こちら、ホーミングプラストによって苦戦していた。

ガイ「チィ、あのチビにも誘導できないし、さっきの爆発を見れば、威力はハンパじゃねえ。ウォーレルニア！出て来い！アクエリアス！」

剣から、水色の男が現れた。かなりごつく、テルマエ マエの表紙を想像して欲しい。

男は右手を前に出し、そのまま右に振り切った。すると、大量の水が噴き出し、ミサイルを包み込んだ。すると、ミサイルのケツから噴き出していた炎が消え、そのまま落下した。

男は時間切れ、というようにガイを見つめたあと、光になって剣に

戻った。

ありがとよ、アクエリアス。

ガイは剣を握りなおし、サウスタに斬りかかる、だが、サウスタ2人はそれをかわし続ける。

そして、1人のサウスタが剣をかわして、ガイの腹に拳を叩き込んだ。ガイが怯んだところでもう1人のサウスタがガイの頭にかかとを落とす。ガイの頭は、そのまま床にめりこんだ。

2人のサウスタは、笑ながらジャンプし、腕を広げる。

「ヴァイラスストーム」

2人のサウスタが腕を上げる。赤色の竜巻が発生し、ガイを囲む。嵐がやんだあと、そこにガイは居らず、穴が開いていた。

サウスタ「床を壊したか。」

サウスタの背後に剣が光る。そしてサウスタを真つ二つにした。残ったサウスタは驚き、あわてて飛び退く。

ガイ「下に逃げたと思ったか？残念、上に逃げました」

サウスタ「なるほど、下に逃げたと思わせて上に跳んだか。なかなか頭を使っただじゃないか。馬鹿の分際で。」

ガイ「お前もここまでだな・・・?!」

ガイは背中に焼きつくような衝撃を覚えた。後ろには笑ったサウスタが立っていた。

サウスタ「私は5人、いや4人もいるのですよ？2対1なんて思わないでくださいね。」

ガイはその場に倒れた。
そこにユウトが駆けつけ、

ユウト「待っててください。こいつらは俺が殺りますから。」

そう言うと、ユウトはサウスタに接近し、1体を蹴り飛ばした。

「シャドウ・ハンマー！！！」

サウスタの頭上に黒いハンマーが現れ、ユウトはそのハンマーを遠隔操作で落とした。血が噴き出し、床が抜ける。

黒鬼は、鬼たちと協力してサウスタを倒している。

6対2、鬼のほうが圧倒的に有利だ。サウスタは防戦1方だった。だが、鬼軍団の攻撃に耐えられなくなり、1体のサウスタが2本の矢に同時に射抜かれた。

サウスタは残り2対。合流し、お互い手を合わせる。すると、むくむくと膨れ上がり、1匹の巨大な蜘蛛になった。足は6本、既に服はない。紫と黒の縞模様の蜘蛛は、鬼たちと同じ大きさだった。

蜘蛛が口を動かし、ひゅんと針を飛ばす。青鬼に命中した。すると、青鬼は悶え苦しみ、そのまま動かなくなった。
場が凍った。

ガイはふらふらと起き上がり、巨大な蜘蛛を見上げる。
ウォーレルニアをしまい、例の伸びる剣を取り出した。

ユウトも、自分の周りに魔方阵を4つ展開させた。

蜘蛛の4つある目が、ガイとユウトを捉えた。そして、毒針を飛ばしてくる。

ユウト「ガイさん、ここ俺が！シャドウウェポン・メタルシールド！」

バリアより範囲は狭いが、硬そうな壁が現れる。

当然、針ごときが貫通するはずもなく、キン、とはじかれる。

赤鬼が蜘蛛に殴りかかる。狙いは足、だが、尻から体液が飛び出し、赤鬼にかかった。赤鬼は見る見るうちに溶け、残ったのはわずかな肉体と骨だけである。

黄鬼も矢を放つが、蜘蛛はそれをかわす。全く相手にされていない。

黒鬼は、何かを決断したかのように立ち上がった。

19話 乱戦(3)

黒鬼は立ち上がった。

そこには黒鬼ではなく、鬼族のリーダーとしてのプライドの塊であった。

ガイ「黒鬼……」

黒鬼は怒りによって顔が真っ赤になり、水蒸気が出ている。2本の角は帯電し、パチパチと音を立てている。

「グオオオオオオオオアアアアアアアアアアアア」
「！！」

黒鬼が咆えた。鼓膜が勢いで脳の中に沈んでしまいそうだ。黒鬼は自我を失っている。白目になり、もはや何を見ているのか分からな
い。突っ込む気なら、フラグを立てるだけだ。他の鬼が宿めるが、
黒鬼は腕で払いのける。やはり何も見えていない。

案の定、黒鬼は蜘蛛に突っ込んだ。

サウスタ「おっと、でかいだけじゃ勝てませんよ。はい、プレゼン
ト。」

蜘蛛が針を飛ばした。黒鬼は頭を右に動かしてそれをいとも容易く避ける。

サウスタ「なんと。冷静を失ってもここまで戦えますか。本当に興

味深い。むしろこっちの方が強いんじゃないですか？」

黒鬼は蜘蛛の目をひとつ掴んで、握りつぶし、顔面に右の正拳を叩き込む。

サウスタ「ギャアアア！」

黒鬼は休むことなく殴り続ける。4つあった目も、すでに全滅だ。

口からは針を発射しているが、黒鬼は蜘蛛の口を動かして猛毒の針を免れる。

ガイやユウト、鬼たちは見守るしかなかった。いや、見てるしかなかった。

サウスタ「ちょ、グフツ、jはg・いgk t j! ! !」

口がありえない形をしているので、うまく発音できない。

黒鬼はさらに殴る。そろそろ顔面がなくなるんじゃないか? というくらい殴る。

サウスタ「hがh g i t h s g・い! ! ! ! ! ! ! ! !」

黒鬼には全く聞こえていないようだ。ガイやユウトにも理解不能だが。

まあ、仲間を25匹近く殺されて、冷静を保ってられるやつなんているはずがない。黒鬼も同じだ。仲間を大量に改造され、自分もさつきまで全く覚えていないのだから。黒鬼はサウスタをこれでもかというくらい殴った末に、正気に戻ったようだ。前には顔面がぐちゃぐちゃになった蜘蛛がいる。

サウスタ「j f h あうい h g・・・やってくれましたね。」

「「「!!!!!!」」」

サウスタが正しく発音した！ユウトは蜘蛛のほうを見ると、蜘蛛の顔面は完全ではないが再生していた。

ユウト「そんな、馬鹿な・・・めんどくさー！」

サウスタ「面倒くさいとは、いい褒め言葉ですね。私のような雑魚はこうやって粘るのが精一杯なんですよ。しかし、あの毒針はですね、ティルジェニーの猛毒の体液を濃縮し、針の中に注入した最凶の毒針です。そして、この体液もそうです。この酸はタンパク質を1瞬で溶かします。故に、貴方たちはこれに触れれば、ジエンドということですね。」

ガイ「そんなことより、何で何人もいたんだよ。」

サウスタ「何だ、そんなことですか。既に、私の本体は死んでいます。しかし、私はその本体です。矛盾してますね。ですが真実です。まず、私の体をたくさん作ります。つくるといっても、1体作るのには最低半年かかります。そして1体当たりに使われる人間の死体は5つ。また魔物の細胞なども必要です。」

ユウト「つまり、人が5人、犠牲に・・・なつたのか・・・？」

サウスタ「ええ、そのとおりです。私としてもとても心が痛みましたよ。同じギルドのメンバーをこんな風にしてしまつて。」

心にもないことを。でも自分が不細工なのは自覚してるんだな。おそらく犠牲になったのはイケメンだろう。

サウスタ「そしてできたのが6つの体です。あとは複雑な作業になります。まず、神経を作り直すために、本体があらゆる動きをして、そのデータを体書き込まなければなりません。それには3年もかかりましたよ。ですがやはり限られた動きです。限界がありますが、この私の今の体、そうですね・・・スパイダーモードでいいでしょう。モードと言っても戻れません。この体は、1つの進化した生命体と同じです。すなわち、どんな動きも可能！あの縛られた体とは違うのです。」

スパイダーモード・・・もつといいのはないのかとガイは考える。

サウスタ「そのあとは知能です。私をサウスタ・アリッジと同じ記憶、思考、目的を持たなければなりません。あの科学者、いや、私は本当に優秀です。なんせ私は彼だから。」

ガイ「ごめん。そろそろ本気で分からなくなってきた。」

サウスタ「黙りなさい、サウスタ・アリッジと同じ記憶、思考、目的を持たせるには脳をそっくりそのままコピーするしかありません。分かりますね？」

ユウト「イケメンの脳か？」

サウスタ「イケメンは余分ですが、正解です。2人分の脳を必要とします。よって、私1人のための犠牲は7人、そして試作品が約70人。なんとも言えぬ優越感ってやつですね。」

狂っている。普通はそこで罪悪感を感じるのではないか？

サウスタ「そしてそのイケメンの脳・・・いや、普通の脳をフォー
マットします。そして、自分のデータを書き込んだデータチップを
脳に埋め込み、起動すれば私の脳が完成ですよ。あとはその脳と体
の相性。あわなければ処分、合えば私たちのようになる。これで一
応終わりですが、質問は？」

ガイは寝ている。ユウトは難しそうな顔をしている。

ユウト「そんなに多くの犠牲者が出る研究を、このマスターは許
可したのか？」

サウスタ「ええ、しましたよ。とても簡単に。お前は優秀な科学者
だ。兵ならいくらでもいる。使ってくれ、と。」

ユウト「ばかげてる・・・お前、ちょっと喋りすぎたぜ、また黒鬼
に口潰されんぞ？」

サウスタ「あの痛みも途中からは快感でしたねえ。」

ユウト「もういいや。ガイさん、行きますよ！」

ガイ「ん？終わった？ああ、終わったね。行きます行きます。」

ユウト「真面目にやりましょうよ。」

2人はサウスタに近づく。ガイは剣を構え、剣を伸ばす。

ガイ「グッ、重いな。質量も変化すんのかよ。」

伸びた剣は蜘蛛の6本の足のうち、1本を貫いた、そしてその足は

黒焦げになって灰になった。そしてそこからは新しい足がニョキつと生えてきた。

ガイ「剣もどんねえし!!!」

ガイはこの剣の性能を把握してなかったらしい。

ユウト「シャドウウェポン・デビルホーン!」

腕が変形し、一角竜の角のようになり、黒く染まる。その腕を口に突き刺す。ブシュウと体液が噴き出し、また再生する。

ユウト「キリがないな。1発どでかいのを撃たないと。」

サウスタ「h j f g r g j」

サウスタの爪がユウトの腕を切り裂いた。

ユウト「いつて!この野郎・・・シャドウ・ヒーリング!」

影が腕にまとわりつき、出血部を覆い、固まる、どうやら止血だけの応急処置のようだ。

ユウトはホーンを解除し、後ろに下がる。

ユウト「シャドウ・プレス!」

指をおkサインにし、口の前に置く。息を思い切り吸い込み、吐き出す。ブオオオ!と黒いプレスが蜘蛛を襲う。プレスが止み、蜘蛛が姿を現す。蜘蛛は腹から上がなくなり、体液をダラダラと流していた。

ユウト「くっそ、足りなかった・・・！」

ガイ「くそ、これしかない。ボルティジー！」

魔法陣が現れ、猿が登場。

猿「お呼びですかい？グリ・・・あれ？」

ガイ「俺の名前はガイだ。お前の力が必要だ。貸して欲しい。なんか大技をあの蜘蛛に！」

猿「お、おお・・・分かった。アルティメットボルト・L V M A X
！！！」

猿が両腕を前に出し、極太レーザーが発射される。それは寸分の狂いなく蜘蛛に向かっていった。

レーザーが貫通し、蜘蛛の体は4分の1程になった。

ガイ「くそっ！ウォーレルニア！」

剣を捨て、水剣を手に走り出す。

ガイ「アクエリアス・シュートオ！」

ガイは上空に跳び、剣を掲げ、魔力をためる。それを一気に振り下ろし、水の斬撃を繰り出す。

ユウト「シャドウウェポン・テラ・ボム！」

ユウトは両手を掲げ、上に広げる。すると薄暗い弾が出現し、むくむくと膨れ上がる。ユウトはそれをよいしょ、と投げる。皆はその様子を眺めている。

ユウト「皆逃げろ！この周辺の部屋は木っ端微塵だ」
言うのが遅い

20話 蜘蛛の生き様(1)

ユウト「皆早く逃げて」

ガイ「チッ、」

ユウトの放った巨大な薄暗い球体は蜘蛛へと落ちていく。
黒鬼も仲間を呼んで逃げようとしている。

サウスタは体がほとんどなく、ぐったりしている。

ユウト「下だ！、下に逃げろ！」

ユウトは影攻撃で床に穴を開け、下の階へ降りる。

ユウト「ヴェステアーロン！」

ヴェ「ああ、なんとなく分かってるぜ。任せな。」

ヴェステアーロンが現れ、ガイを乗せて降下する。ガイは先ほど開けた穴から逃走を図ったようだ。鬼たちは、ズシン、ズシンと音を立てながら着地する。ここ周辺の部屋は実験スペースなのか、とても広い。ここは、さっきサウスタと戦ったところよりも広い。

ドッカアアアアアアアアアアアアアアア！！！！

上の階で爆発が起きた。上の床は全て壊れ、下に降ってくる。

ユウト「馬鹿な、こんだけしか壊れないだと・・・？」

ユウトはこの周辺の部屋は吹っ飛ぶと言ったが、実際は1部屋しか壊れていなかった。そして、その部屋も壁にはあまり壊れた痕がない。

砂埃が立ち、天井を見上げるとさっきの部屋の分天井が高くなって・
・・・・・！！！！！！

ユウトとガイは驚愕した。鬼たちもだ。天井には、蜘蛛の巣を作り、その中央で固まる蜘蛛が1匹。そう、サウスタだ。

サウスタ「はははは！！！こんなで私を仕留めたと思いましたか！？甘いですね！」

そう言い、さらに上の階の壁にも糸を張り巡らす。なんだか黄ばんだ糸だが。サウスタの体重を支えるのだから、とても丈夫に違いない。つかまってはいけない。

サウスタ「危なかったですねえ。あんな攻撃をもろに喰らったら即死ですよ。変身してなかったら終わってましたね。」

ユウトは携帯電話でロイに電話する。

ユウト「ロイさん、こっちは結構時間かかりますけど、どうですか？」

ロイ「問題ない。俺もマスターを探している途中だからな。さっきの爆発、テラボムだな？それでも倒せないのか？」

ユウト「ええ、まあ必ず始末します。では」

ロイ「ああ、死ぬなよ。」

ユウトは携帯をしまう。

サウスタ「終わりましたか。では再開と行きましょうか。」

サウスタは毒針をガイとユウトに向けて乱射するが、ユウトのシールドによって阻まれる。ガイは剣を拾いに行こうとダッシュする。サウスタが阻止しようと酸をぶちまけた。だが、それもヴェステアーロンの攻撃によって阻まれる。ガイは剣を拾い、サウスタを見据える。

サウスタは天井から飛び降りた。着地時に足が全部折れたが、すぐに再生する。そんな中、ユウトは鬼を守るために、鬼のところにいた。サウスタは、慌てる様子もなく、ただ相手の動きを待っていた。

黄鬼が矢を放った。回転しながら蜘蛛に向かっていく。命中したが、矢がズブズブと蜘蛛の中に沈んでいく。サウスタが跳躍し、その黄鬼の後ろに着地する。ユウトはしまった、と顔をこわばらせる。何

が発動させようと思ったが、遅かった。すでに黄鬼の上半身がなかった。そのまま赤鬼が顔面に右足で思い切り蹴ろうとするが、ひよいかわされ、爪でその足を切断され、そのまま右腕をも切断する。サウスタは楽しそうに笑う。赤鬼も、ほんとは即死させることができただろうが、しなかった。殺生を楽しんでいるのだ。

ユウト「シャドウウェポン・ソード！」

ユウトの背中に剣が現れる。剣を発射し、目を潰す。サウスタが楽しそうに絶叫し、毒針を撒き散らす。ガイはヴェステアローンの魔術によって免れた。そして、鬼たちは、ユウトの魔術により、危険を回避した。

サウスタは1時的に目が見えないだけで、すぐに回復する。もう2つの目が再生している。

猿「ボルトミサイル！」

少し忘れ気味だったが、忘れんなとばかりにミサイルを発射する。サウスタは正確に爪で打ち落とす。しかし、爆風で周りが見えない。

ガイ「今だ！月下砲・王雷！」

ガイの剣がグイグイグインと伸びる。それはサウスタの顔面を貫通する。そして、その周囲は黒く焦げ、無くなっている、穴が開いているのだ。

ユウト「シャドウ・ハンマー！シャドウ・プレス！」

ユウトは2つの魔方陣を展開し、人よりも大きいハンマーを召喚し、

蜘蛛の頭部を潰す。大きな地響きになる。それでも休まず。口の前に手を当てて、ブレスを発射する。

ハンマーによる煙と、ブレスによって、サウスタの周りは何も見えなくなった。

煙が薄くなっていく・・・

何もいない？体液が飛び散っている。跡形もなく消したのだろう。

ユウト「ガイさん、帰りますよ」

ガイ「何言ってるんだ！！！！伏せろ」

ユウト「えっ、何？」

ユウトは咄嗟に伏せる。ユウトは一瞬上に何か通り過ぎたような感覚を覚えた。

そして、ユウトの隣に何か落ちてきた。大きい、岩ぐらいあるんじゃないか？

ユウト「く、黒鬼・・・？」

そう、床には黒鬼の頭が転がっていた。

21話 蜘蛛の生き様(2)

ゴロン

ユウトの横には黒鬼の頭。そして数秒後、ズシィィン、と黒鬼の体も遅れて崩れ落ちる。

ユウト「え・・・何で・・・」

サウスタ「んふふ、黒鬼さん、ご苦労様でした」。

ユウトの背後からサウスタの声が聞こえる。あの攻撃を回避したらしい。

本当に生命力の強い蜘蛛様だ。蜘蛛はケラケラと笑うように跳ねている。

ユウトはそんなサウスタを血走った目で睨んでいる。

そうだ、俺がいけなかったんだ。俺があそこで気を抜いていなければ黒鬼は、他の鬼の助かったかもしれない。ユウトは鬼たちのほうへ目を向け、鬼たちの亡骸を見つめる。本当にすまない。俺が調子乗って、肝心なところでダメだったから。

さっき同じ志を持ったばかりの鬼たちなのに、そこまでの感情をもってしまうほど、いい種族だった。

ユウト「蜘蛛があゝ、殺す！シャドウ・フレアソード！」

ユウトの背後に薄い赤色の炎を帯びた剣が6本現れた。

サウスタ「火属性だと！？さっきの薄暗いのだけじゃないのか！」

ユウト「ああ、基本は影だ。それを少量の属性の魔力と練り合わせることで、属性を帯びた影となる！だが、魔力を混ぜるに当たって影と影は混ざっても威力が変化するわけではないけどな。」

サウスタは後ずさりする。

ユウトは剣を1本ずつ発射した。1発、2発、と蜘蛛が巨体に似合わない素早い動きでかわし続けるが、5発目にして、後ろ足に剣が命中し、6発目はその足の太腿に突き刺さった。サウスタは地面に落下し、足をバタつかせる。剣は沈むことなく炎を発し続け、蜘蛛の足を蝕んでいく。

サウスタは糸を剣に向けて発射する。糸は剣の柄に絡みつき、剣を引っかく。

ユウト「シャドウ・ガイアダンス！四獣降臨」

サウスタ「今度は土か！」

ユウトの周辺の床が盛り上がる。そして、4本の柱になる。それぞれの柱の頭は龍、鳥、虎、亀になっている。それぞれ床の色の白色だが、迫力は十分だ。

ガイ「四獣降臨が出たか、いつみてもすげえな。」

青龍、白虎、朱雀、玄武は蜘蛛に襲い掛かる。顔を突っ込み、蜘蛛の体を貫き、縫うように暴れまわる。

ユウト「この床が素材なら、おまえの酸や毒針は効かないよな。せいぜいもがいて苦しんで、己の犯した罪を悔いるんだな。」

青龍が目喰いちぎり、朱雀が背中をついばむ。玄武は足を引っ張り、白虎は腹を食べている。サウスタは抵抗を試みるが柱が絡まって動けない。

四獣が蜘蛛を食している最中にも蜘蛛は再生する。だが、それをも四獣たちは食い続ける。

まるで、蜘蛛は草食動物、四獣たちはその1匹を襲う肉食動物だ。容赦がない。

だが、サウスタはこのままでは死ぬことはないだろう。だが、鬼たちが受けた痛みや悲しみはこんなものじゃない。

サウスタ「あああああああああ！」

サウスタ歪んだ口から毒針を大量発射した。その量は今までの比じゃない。1秒間に50発は発射しているだろう。

そして、

ガイ「くあっ！」

ユウト「うっっ！」

ヴェステアーロン・ボルティジ「ユウト！・ダンナア！」

2人が被弾した。みるみる力が抜けていき、膝から崩れ落ち、苦しそうに胸を抱える。
涎がダラダラとたれ、震えが止まらなくなる。だが、四獣は止まらない。

サウスタ「どうだ・・・これ・・・で・・・貴方たちだって・・・死にます・・・」

ガイ「クソ・・・冗談は顔だけにしろ・・・」

地味に貶している。

解毒剤、解毒剤はどこだ？とガイはあたりを見渡す。オレは1針だけだが、ユウトは5本は当たっていた。俺が見つけなきゃ・・・。

サウスタ「無駄です・・・解毒は・・・できません。」

くっそ、ここまでか。

ウォーレルニア・・・今まで、ありがとな。少々荒い使い方を何度もしたけど、それももうできない。アクエリアス、結局何も、話さなかったな。話してみたかったんだぜ？お前のそのゴツそうな声を聞いてみたかった。畜生、俺があんな蜘蛛野郎に負けるなんて。

口の中に地の味がする。内蔵もやるのか・・・こんなところで・・・

ガイ「うう・・・ううあああ・・・」

手に持っている剣が光る。

ガイ「うううおおおおおおあああ！」

剣が水色から濃い青色に変わる。

そして、体の気だるさは全て吹き飛んだ。血の味はするが。

？「ついにここまで来たな。ガイ・ランドルフ。私はアクエリアスだ、霊剣ウォーレルニアに住む精霊だ。」

アクエリアス「この剣はお前が強い意志を確認しなければ本来の力發揮できない。そして、今、それが確認された。この剣は霊剣ウォーレルニアではない。この剣の本来の名前は、霊剣ルシフェル」

ガイ「ルシフェル・・・そうだ！ユウトは！治せるのか！？」

アクエリアス「ああ、見ておけ。」

アクエリアスがユウトの元へ駆けつける。そして、片手に緑色、もう一方の手には青色のオーラを纏い、ユウトに強引に押し付ける。ユウトは一瞬ビクンと跳ね上がり、動かなくなった。

アクエリアス「これで大丈夫だ、しかしこの毒は強力だ。内部損傷はおるか、外部損傷まである。彼は起きたとしても、すぐには動けないだろう。」

ガイ「ボルティジ、ヴェステアーン！ユウトの近くにいろ！絶対に守れ！！」

四獣は崩れかかってきているが、まだ動きを封じてくれている。今しかこいつに止めをさせない。

ガイ「アクエリアス！1発で決める！」

「
アクエリアス「ああ、確かにこいつは厄介だ。今しかないだろうな。
」

ガイは自信に満ちた表情で蜘蛛を見つめる。

ガイ「サウスター！！お前はやりすぎた！あの世で泣いたってもう遅い！お前は死んでも永久に犯罪者のままだあ！」

22話 蜘蛛の生き様(3)

ガイはルシフェルを握り締める。

霊剣ルシフェルは、ガイの所持していた霊剣ウォーレルニアが一種の封印を解かれて元の形に戻ったものである。

片刃で薄く鋭い。刀身は濃い青色で、柄は両手で持って拳1個分ぐらい余るほどだ。

鞘には装飾が施されており、剣を抜かなくても名剣だと分かるほどである。

蜘蛛にはまだ四獣が纏わりついている。

ガイは魔力を剣にこめる。

ガイ「ブルー・オン・ブルー！」

剣をかざすと、水が集まり、細身の刀身が分厚い大剣に変わる。水はだんだんと固まっていき、氷とは違うが宝石のように硬そうな物質に変わる。透明な宝石の中に薄い刀身が輝く。美しすぎてガイには似合わないそうだ。

大量の水を凝縮させているので見た目よりもずっと重い。

ガイ「うっおおおおおおおおおおお！！！！！」

ガイが大剣を振り上げる。

ガイ「ファイナルアクエリアス！！！！！」

ガイはその大剣を蜘蛛の顔面にぶち込もうとする。

そんな中、サウスタは

私は死んでしまうのですね。

幼いころから親には暴力を受けていた。そして、散々私を痛めつけたあと、蒸発してしまった。

そして私は、その憎き両親のあとを追うことはできず、公園で空を見つめていた。そして、ある一家に拾われた。その人たちは、私に優しくかった。昔受けていた虐待など、忘れてしまうほど。

そして私は魔法学校に入学した。当然のように私は誰からも相手にされなかった。それは、この容姿と両親がいないせいだ。筆箱や教科書を隠されるのは日常茶飯事だった。しかも、次の授業の教科に使う教科書を隠すのだから質が悪い。

椅子の上に画鋲が2、3個あって、それを踏んづけて泣いた日もあった。だが、先生は何も言わなかった。机の上には菊の花が置いてあったり、死ね！チビ！糞野郎！などの暴言が油性ペンで大きく書かれていたこともあった。

もちろん家では何も言わなかった。自分を救ってくれた恩人に心配をかけたくないのは当然だろう。そして、ここが唯一の心のより所だった。

帰る場所があるから、トイレで用を足していたときに水を被せられたって、テストでもいないカンニングのせいで先生に怒られたって我慢できた。

私は、これは自分のためだと言い聞かせて魔法や学問に打ち込んだ。

しかし、ある日学校から帰ってきたときのことだった。

私は部屋の中から話し声が聞こえたので、耳を立てて聞いてみた。
義父の仕事のことだろうか、義姉の進路のことか、それとも自分の
将来か。

どれにも当てはまらなかった。

母「サウスタ、今更だけどそろそろ邪魔になつてきたわね。拾つた
ばかりのころは小さくて可愛かったけど、今じゃあんなになつて・
・」

父「俺らの血が通っていないからな、適当な理由をつけて追い出す
か？」

母「うーん、あの子には悪いけど、施設に入ってもらおうか。」

私は耳を疑った。あんなに可愛がってくれたのに、それはうわべだ
けだったというのか。

これは一応自分の将来に入るのか？そんなことはどうでもいい。

サウスタはドアを蹴破つて中に入った。父母は驚きを隠せない。

サウスタの手には包丁が握られていた。

サウスタ「何で・・・そんな・・・うわあああああ！！！」

サウスタは無我夢中で父母を切りつけた。もう死んでいるのに更に
傷つける。もはやどっちはが母でどっちが父か全く判別できないほ
どになった。そして、ようやく我に返る。

何だ、この汚らしい肉体は。私がやったのか？そうか、だが私は
悪くない。悪いのはこの男と女だ。

ただいまー！お父さんお母さん、いるー？

ああ、姉さんか。あいつもだ、何を考えているか分からない。そして、いいことを思いついた。

サウスタ「姉さんっ！！帰ったの！？今すぐ来て！父さんが、母さんが！！」

姉「何があつたの？」 キヤッ！！！！」

姉は見てしまった。両親の無惨な残骸を。

姉「嘘よ・・・誰が・・・もしかしてサウスタ・・・あなたが・・・？」

サウスタ「姉さんもそうやって僕を疑うのか・・・」

姉「何言つて・・・うグ！」

姉の腹部には包丁が刺さっていた。そして、包丁が引き抜かれ血があふれ出す。

もはや、学校どころか世界に絶望していた。こんな世界じゃダメだ。僕の居場所は・・・

そんなことを考えて振り返り血を浴びて血だらけになった服で近所の公園を歩く。街中の視線など気にならない。（この世界には警察と呼ばれるものはなく、国ではなく、その地域の民が経営する対犯罪組

織がある。」

そんなとき、僕はあの人に出会った。

アシユリーと名乗る女性は、ジニアットという不正ギルドのマスタ
ーだという。

「あなた、いい目してるわ。来るわよね。」

即答した。行くと。そこそが私の居場所だと感じたのだ。

勘は的中した。誰も信じあわない、弱いものは切り捨てられる、そ
んな理想の世界がそこにはあった。

そこで、私は科学者を務めた。私は自分でも分かる、天才だ。私に
できないことはない。その気になれば、この城を飛ばすことだって
可能だ。

そして、私に課せられた課題。それは、神をも超越する力。当時の
私には何でもできると信じていた。

そして、私は研究を重ね、今の体を手に入れた。当然、神なんか超
えられるわけがない。

いつか、越えようと思っていたのに、超えてマスターに笑って欲しか
った。絶望の中で見つけた居場所だから。光だから。

目の前に蒼い剣が降ってくる。

マスター、あなたのお役に立てたでしょうか。

サウスタ「マスター、私は・・・」

グシャ・・・ドパアアアアン！

剣は床にめり込んでいる。剣が顔面を潰す。その瞬間、その剣から大津波が発生する。粘り気が強い水だ。その水に触れた蜘蛛は弾けとび、跡形もなく消えた。

ガイ「ハア・・・ハア・・・ユウト、終わったぞ！」

23話 メアリーの暇つぶし(1)

sideメアリー・マサヤ

ロイがこちら辺に強い魔力を感じるっていうけど、ないわねえ。暇だわ。

皆今頃楽しくやってるんだろうな。

メアリーさん、まるでピクニックに来てるみたいだ。ここは戦場だよな？アレ？

メアリー「あれ？行き止まり？」

メアリーの前には壁がある。天井は高い、ここで終わってるはずないんだが。

真っ白な壁がメアリーたちに立ち入り禁止というようにそびえる。

メアリーは邪魔なんだよ！と壁を殴ろうとした。しかし、白い壁に拳が当たるとはなかった。すり抜けたのだ。

メアリー「ホログラムか、脅かしやがって。」

マサヤは完全に縮こまっている。

？「え？誰が入ってきた！ああ！どうしよう・・・」

メアリー「私はメアリー、この子はマサヤ。あなたは何ていうの？」

か、可愛い！

名前教えちゃおうかな。

「ぼ、僕の名前はボルジアント・フェアレ。だ、第1部隊隊長。隊長ついても第1部隊は僕だけだけど。」

何、この子。ガリガリじゃない。ちゃんとご飯食べてるのかしら。こんなに色白で・・・。しかも第1部隊？てことはこの子が強い魔力の持ち主？でもそんな雰囲気は微塵も感じないわ。

メアリー「？なんで一人なの？」

「僕は、その・・・こんな性格だから・・・。」

メアリー「そうねえ、このギルドはいくつ部隊があるの？」

メアリーは胸を強調しながら言った。

「あつ！あの・・・でも・・・・・・6つあります。」

メアリー「いい子ね。あと、キミは強いなの？」

「え、えと・・・一応第1部隊隊長ですから・・・まあ。」

メアリー「ならいいわ、じゃあちょっと待っててね。」

メアリーは携帯電話取り出し、マサヤを除く全員に部隊の数をメールで送信した。

メアリー「じゃあ、始めましょ」

メアリーは槍をボルジアントの頭に突き出す。

ボルジアントは突然のことに驚きながらも頭を傾けてかわす。

マサヤは外から見守っている。

メアリーはそのまま槍で頭を薙ごうとする。しかし、ボルジアントは後ろに飛びのいて距離をとる。全く構えず、寒そうにポケットに手を入れている。ちよつと待ってよ、まだ準備中だよ・・・という表情だった。

メアリーはお構いなしに突きを連続で繰り出す。高速で上下左右に変幻自在に槍を突き出す、全部紙一重でかわされる。そして、最後に繰り出した切り上げは頬をかすめ、ボルジアントの頬に血が流れる。

「あれ、ほつぺたが痛い・・・血・・・？血い？ええ・・・あああ・・・うわああああああああああ！！！！！！」

ボルジアントの魔力が膨れ上がる。

メアリーはその上がりように驚いた。1から100になるぐらいの飛躍的上昇だ。

1部隊が1人だというのはこれがあまりにも危険だからだろう。

「誰だあ？ブロンド、お前か？」

メアリー「ええ、そうよ」

笑顔で答える。

「許さない・・・許さない・・・許さない・・・」

メアリー「かかってきなさいよ。」

この言葉にボルジアントが反応する。

「いいの？いくよ？」

だから早く来いっての、とメアリーは挑発する。

ボルジアントは、一瞬でメアリーの背後に移動した。そして、首に手刀を打とうとする。

メアリーは、ギリギリでしゃがんで避ける。集中してなかったから全然わかんなかったわ。危ない危ない。

そして今度は手刀をそのままたてに振り下ろし、脳天をかち割ろうとする。

メアリーは槍を頭上に掲げ受け止める。ものすごい衝撃だ。当たったらどうなることやら。

ボルジアントの目は瞬きを全くせず、常に見開いている。ハッキリいって怖い。

メアリーは起き上がり、槍でボルジアントを薙ぐ。ボルジアントはしゃがんで避け、アップパーパンチを繰り出す。メアリーは体を反らして避け、つま先でボルジアントの顎を砕こうとする。ボルジアントは手刀ではじく。

メアリーは回し蹴りを繰り出す。ボルジアントの目が一瞬メアリー

の股にいった。それにより、ボルジアントは避けきれず、頭部に攻撃がヒットし、吹っ飛ぶ。

メアリー「全く、まだまだ子供ね」

ボルジアントは痛いけどそれ以上の収穫を手に入れたような顔をしていた。頭の中で映像を繰り返し返しているようだ。ために近くに落ちていた瓦礫を投げてみた。普通に当たった。しかも金的に。ボルジアントは痛そうにびよんぴよんと跳ねる。

メアリーは首を傾げる。メアリーにはこの痛みは分からない。

しばらくすると倒れこみ、ごろごろし始めた。そんなに痛いのだろうか、とメアリーは考える。
うう・・・と、呻いている。

あ、やっと起きた。

ボルジアントは、この世の終わりのような顔でフーフーフーと息を切らしている。

目は血走っている。

ボルジアントは若干動きが鈍いが、動き出した。

走りながら飛び、膝をメアリーの顔面に叩きつけようとする。

メアリーは足を掴み、回転しながら顔を地面に叩きつける。ゴスツと鈍い音が響いた。

マサヤは手で顔を隠している。

ボルジアントは鼻血を見てさらに発狂する。

さらに魔力が膨れ上がる。

24話 メアリーの暇つぶし(2)

ボルジアントの魔力が膨れ上がるー

確かに、これは危険だ。

常人がボルジアントの近くにいただけでどうにかなってしまいそうな魔力なのだから。

ボルジアント「僕を怒らせたね……。せっかく優しく接し合おうと思ったのに、もうダメだあ」

メアリー「へえ、楽しそうね。私はそっちの方が嬉しいわ。」

ボルジアントが動き出した。一瞬でメアリーの懷に潜り込み、メアリーの腹に手のひらを叩き込む。

メアリーはその速さに動けず、もろに喰らってしまい、後方に吹っ飛んだ。

ボルジアントは止まることなく、追い討ちをかけようとする。メアリーの顔面に膝蹴りを決めようとする。

メアリー「うそっ、速っ……。うっ！あつぶね！」

メアリーは咄嗟に起き上がり、槍で膝を受け止める。そして石突きで払いのける。

ボルジアントには全く構えていないが、隙という隙が見当たらない。

ボルジアントはメアリーに殴りかかる、メアリーも苦い顔をしながらも避け続ける。

時折揺れる胸をマサヤは見ようとする。やはりマサヤも健全なる男

子高校生だ、気になって当然だろう。

マサヤ「動きづらそーだな・・・」

ボルジアント「えへ、お前可愛いから俺の玩具にする」

メアリー「どういうこと!？」

ボルジアント「こういうこと　ハートポイズン!」

ボルジアントの目の前に紫色のハートが現れた。ボルジアントが合図を出すと、それは高速でメアリーに飛んでいった。そして、命中するとそのままメアリーの中に沈んでいった。

メアリー「ちょ!何コレ!」

特に変わった様子はなさそうだ。
マサヤも一安心した。

ボルジアントは微かに笑みを浮かべた。

ボルジアント「これで俺の勝ちだね。メアリー」

メアリー「はあ!?!気持ち悪い」。気安く名前で呼ばないでくれる・・・ん?」

メアリーは違和感を感じながらもボルジアントに攻撃を繰り返す

とする。

ボルジアントはノーガードである。
舐めやがって、とメアリーは渾身の突きをボルジアントの心臓めがけて突き出す。

なおもボルジアントはノーガードだ。

メアリー「はあ!!」

え、何で？」

メアリーの攻撃はヒットしたはずだった。

しかし、槍の先がボルジアントの胸の寸前でピタリと止まっている。

メアリー「何!?!どうやって止めたの??」

ボルジアント「いや?メアリーが勝手に止めただけだよ?」

メアリー「そんなはずは・・・クソ!何で出来ない!」

マサヤ「師匠!!さっきのハートですよ!それになんか仕掛けがあるはずです!」

ボルジアント「ご名答」。この人は僕のものだ。さっきのハートは、俺、いや僕が独自に生み出した魔術でさあ。この術を喰らった人は、僕が倒れるまで僕のことを思い続けるのさ。無意識のうちにね。悪くないだろう?メアリー、思いの人に倒されるんだから。いや、このまま奴隷でもいいか。」

メアリー「気持ち悪ーい・・・?」

ボルジアント「ほらほら、何か違和感感じてるでしょ？そのうち僕のことしか考えられなくなるよ。」

25話 メアリーの暇つぶし？(3)

マサヤ（もしかして、これ、師匠じゃ勝てない？）

メアリー「アンタみたいな不細工、だれもときめかないわよ。」

ボルジアント「知っているさ、だからこの魔術を作ったんだ。

皆もメアリーみたいに僕を不細工と言った。事実だけど許せなかった。僕は外見で判断する人が大嫌いなんだ。この魔術を作ったときは興奮したよ。だって、女が僕のことを見始めるようになったんだもん。」

メアリー「なんともエロい魔術ね。」

マサヤ（俺にも教えてくれ！！！！）

ボルジアント「だけど、この魔術にかかったものは途中で耐え切れなくなつて壊れてしまった。体じゃなく、心がね。」

メアリー「やつぱり嫌だったのよ。そんなくだらない魔術作つてる暇があるなら整形でもしたら？」

ボルジアント「そんなことを言つて、もう僕に対して違和感を感じているくせに。強がらなくなつていいんだよ、メアリー。ここまで耐えたのはキミぐらいかな。

ちなみに、マスターのアシユリーさんには全く効かなかったよ。」

確かに、もう私の心は持たないかもしれない。

脳の思考の40%はこのダメ男になつてしまった。

ボルジアント「行くよ、メアリー。ほら！避けてみる！」

ボルジアントの腹を狙った右の蹴り。メアリーなら普通にバックステップで避けることができたはず・・・だが、メアリーはその攻撃を避けることなく、もろに喰らった。

この感覚は、肋骨が2本ぐらい折っただろうか。でも不思議と嫌悪感を感じない。

ああ、術に落ちたのね・・・。

ボルジアントは更に骨ばった拳で襲い掛かってくる。メアリーは自分の意思なのか避けずに受け続けている。

マサヤ「師匠！ダメです！避けて！！」

はっ！そうだ、なにこんな攻撃受けているの？

メアリーはマサヤの掛け声によって目を覚まし、距離をとる。

すばらしく危ないかつエロい魔術だ。

これはもしかすると・・・

ボルジアント「その男、邪魔だね。僕とメアリーの二人の時間を・・・」

ボルジアントの視線がマサヤに向く。

メアリーもその視線を目で追う。

ボルジアント「ふふっ、掛かったね。メアリー、本当の狙いはメアリー、キミさ。ハートポイズン！」

ボルジアントの目の前にまたしても紫のハートが現れる。

本当に気持ち悪い。

ボルジアント「発射」

メアリーは既に踏み込んでいて避けることができない。
するりとメアリーの胸に溶け込んでいく。

メアリー「う・・・ああ・・・」

メアリーの頭の中にボルジアントの記憶が入り込む。

幼いころの記憶。

家族は父親との2人暮らし。

しかし父は居て居ないようなもの。

いつも女を作っては夜に遊びに行く。まだ幼かったころのボルジアントはこのことを父はお仕事が忙しいんだ。と思っていた。

ボルジアントはある日、父の預金通帳を見てしまった。

45000

さすがのボルジアントも驚いた。

この預金額の低さに。

そして、ボルジアントは尾行を試みた。

そして見たのは父一人と女三人が一緒に歩いている。

父は女たちと宝石店に入る。

どれもこれも高そうだ。しかしボルジアントは宝石などには興味はない。純粹に父親が何をしているかだ。

父は、店員を呼び出し、ショーケースを指差す。1つではない、4つはある。

女たちは跳ねて喜んでいる。

ボルジアント「お父さん!! やめてよ!」

すると父が寄って来て小声で、

父「げ、ボルジアント・・・お前何でここに居るんだ!」

と言った。

ボルジアント「こんな高そうなもの・・・僕はお父さんは仕事してるのかと・・・この嘘つき!」

女1「なにこの子」

女2「もしかして息子?」

女3「ぶっさいく」

父「違う! こんな子俺は知らん!」

ボルジアントは確かに聞こえた。心がガシャンと割れる音が。呆然としていたボルジアントに父がのしかかってきた。

ボルジアント「え? ちょ、お父さん重いよ! あれ? お父さん?」

死んだ。父は死んだ。だがどうでもよかった。誰だ?

アシュリー「酷いわね、息子に誰だなんていう男は。生きている

価値がないわ。その女たちも、女と呼べるにはほど遠い種族ね。死になさい。」

女たちはバタバタと倒れ伏した。

ボルジアントにとっては強すぎるくらいの刺激は、逆にボルジアントを覚醒させてしまった。

アシュリー「来なさい？貴方の好きなようにさせてあげるわ。」

そこからは、覚えていない。

だが、魔術を作ったときは覚えている。

無我夢中で、完成したときは嬉しくて死にそうだった。

早速、女兵士に試した。

見事、女を人形にすることができた。

男にも試したが、全く変化がなかった。

まあ、あつたら嫌だが。

そして、もしや思い、アシュリーの元へ向かう。

そして、試す。

右手ではじかれた。

正直落胆した。せつかくマスターを己の人形にすることができたかもしれないのに。

マサヤ「師匠！師匠！！

メアリー！！！！！！！！」

メアリー

・・・匠・・・師匠・・・

誰だよじゃますんな

メアリー！！！！！！！！

！！！！

私は何を！

さっさと蹴りをつけて・・・ってアレ？動けない！？

何コレ・・・鎖？

くっそ、ピンピンに張ってやがる。

メアリーの四肢には赤色の鎖がつながっている。

壁から伸びている鎖はメアリーを離さない。

ボルジアント「えへへ、メアリーの思いを確かめるためにこの魔術を使ってみたんだ。自我を失っていたメアリーは簡単に掛かってくれたよ。まあ、2発喰らって、今正気にいることはミラクルってやつ？ちなみに、その鎖は僕のことを思うほど強く縛るんだよ。そのうち、上半身と下半身が千切れるかもね。」

メアリー・マサヤ「!!!!」

この間にも鎖はどんどん張っていく。

ボルジアント「あつはつは！これからどうやって遊ぼうかな、ね
えメアリー」

メアリーは力なく頷いた。

マサヤの周りに、ドツと重い魔力が吹き荒れる。マサヤの腕、脚は
光り輝き、いくつもの魔法陣が現れている。マサヤはこんなの初体
験だが、使い方は分かる。

この10個の魔方陣は、俺のためにある。
腕に3つずつ、脚に2つずつ。

魔力に底を感じない。火事場ってやつか。

これは、

祖なる魔術

”ビギニング・テン・スペルズ”

ボルジアントも目を見開いて驚いている。

メアリーは俯いたまま、時折呻き声をもらす。

マサヤ「待っててください師匠！今助けます！」

メアリーの返事はない

26話 マサヤ覚醒（前書き）

今回、次回は属性ごちゃごちゃです

26話 マサヤ覚醒

ビギニング・テン・スペルズ

魔術、それは古代25人の手によって創造された。

魔方陣に魔力を流し込むという単純な発動方法だったが、当時の人間たちは魔方陣から作成しなければならない。

そして、その25人は、何代もの時間をかけて、祖なる魔術。ビギニングを創造した。

威力は強力すぎた。副作用もハンパではない。

そして、1人の男はあまりの強力さに耐えられず、自我を失ってしまい。多くの人間を殺した。

その中には、ビギニング作成者も居る。

故に、この魔術は禁術とされ、封印されてきた。

だが、自らその魔術を呼び起こした者は2人居る。

それは、現在覚醒したイワモト・マサヤ

そして・・・もう1人

ロイ・ベルデム

この男は、呼び起こすとともに、改良を重ねた。

改良も決して簡単ではなかったことを理解していただく。

改良の結果、得たもの、それは

副作用の軽減

威力の向上（小）

詳細は後ほど

sideマサヤ

力が体中にみなぎる・・・
これなら、あの男だって。

マサヤ「右足に宿りしは、重力をも超越する風！エンシェント・ソニック！」

ボルジアント「か、風だとお！」

マサヤが一瞬にして消え、ボルジアントの背後へ。そして、右足で頭を蹴る。ボルジアントはぎりぎり反応し、腰を低くしかわす。そして、ボルジアントは腹に蹴りをお見舞いする。マサヤは避けられず、当たってしまう。腹の部分は金属化していない、いや、できない。彼は今、腕と脚に金属化を集中しているため、腹にまで延ばしたと

する。すると、この魔術は一瞬で消えるだろう。

マサヤは空中で受身を取る。そのまま空を蹴り、ボルジアントの顔を殴る。ボルジアントはまたもギリギリで避け、カウンターを決める。

ボルジアント「は、はは！見かけだけか！舐めないで欲しい、僕、いや俺だって第1部隊隊長だ！お前なんかに負けてたまるか！なあメアリー」

メアリーの様子がおかしい。

一刻も早く倒さねば。

マサヤ「左腕に宿りしは、地球をも操る力！ガイア・フォース！」

マサヤの左腕に土属性が纏わりつく。

ボルジアントに向けて再び走り出す。ボルジアントの正拳にあわせて、左手を振り上げる。すると、床が盛り上がり、正拳を受け止める。

そして、床の壁が崩れた先には・・・誰も居ない。

背後か！

遅かった。ボルジアントは右の蹴りをくらい、背中を突き出した格好で吹っ飛んだ。壁に激突し、パアアアンと壁が少し壊れる。

ボルジアントは痛てて・・・と起き上がる。

ボルジアントは血を吐いている。

ボルジアント「クソクソ！もう許さん！火と水、今ここに交わり、消えることなく永久に燃え続ける炎となれ！蒼炎龍！」

ボルジアントは背後に巨大な蒼い炎の龍を召喚した。目だけは紅い。

メアリー「召喚・・・この地に降臨し、邪念の血を啜り尽くせ！あ
とは任せたわ、ルージュ！」

ボルジアント・マサヤ「へ？」

メアリーの目の前に細身で170cmくらいの魔女が現れた。爪は
長く、全身黒い化粧ばかりだ。

ルージュ「メアリー？何よその無様な格好。」

メアリー「なんのなんの、演技よ。演技。」

メアリーの鎖が緩々になっていく。そして、メアリーの脚が地に着
く。

メアリー「でも動けないから、せめてその炎の龍を潰して あは
は」

ルージュ「そんだけ？手ごたえなさそうな相手ねえ。だったらそこ
のピカピカの少年のほうがいいわよ。おいしそうだもの。」

マサヤ「メアリーさん、最初からお願いしますよ」

メアリー「いやいや、最初から私はあなたの覚醒を狙ってたのよ。
ビギニングが使えるのこれでマサヤとロイよ。しかも風だなんて、
古の属性じゃない。つかルージュ！動け早くう」

ルージュは3倍はあるだろう大きさの龍の頭に向かって跳躍する。
龍が炎の弾を発射する。ルージュは受け止め、跳ね返す。しかし、
やはり炎、吸収してしまう。

ルージュ「なあんだ、やっぱり自分の炎じゃ巨大化しないか・・・」

ルージュはつまらなそうに右手を前に出し、手を広げる。

ブラッド・イクスプロージョン

ルージュがそう呟くと、手から極太の紅いレーザーが現れ、蒼炎龍を貫く。

胴体にでっかい穴を開けられた龍は倒れ、周りの炎はだんだん消えていった。

ボルジアント「そんな・・・僕の守護神が・・・僕だけの・・・」

ルージュ「あ、貴方が作ったの？道理で弱いわけだ。いい？私たちは年齢で強さがほとんど決まるのよ。もちろん例外もあるわ。ちなみに私は734歳。でも300歳で私より強いのも1人だけ居るけどね。」

メアリー「手綱づけるの大変だったんだから。もう」

ルージュ「wあなたの熱意に負けたのよ。でも、デートと被っている日は来ないからヨロシク。じゃあね」

ルージュは消えていった。

メアリーは手を振っている。

ボルジアント「どういうことだ・・・メアリー、キミは・・・」

メアリー「効くかあんなショボイ術。マサヤが楽しみで掛かった振りしてたの。記憶流れ込んできたけどね。同情するわ。それ・だ・け」

マサヤ「いりませんよそういうのゝさっきの痛かったんですよ?」

メアリー「私のほうが痛いわ!何発喰らったと思って・・・」

ボルジアント「五月蠅い!!!!!!!!!!」

メアリー「マサヤ、今の貴方なら勝てるわ。」

マサヤ「はあ、何か適当ですね・・・」

マサヤ「グラビティ・ゼロ」

再び風属性の魔法を発動し、神速でボルジアントに襲い掛かる。

左手を振り上げ、床を操作し、ボルジアントの動きを封じる。

そして金属化している右腕で、思い切り顔を殴り飛ばそうとする。

マサヤ「右手に宿りしは、地獄より現世に迷い込んだ業火!ヘル・ブレイズ!」

右手に黒色の炎を纏った右手はボルジアントの頬をとらえ、抉り取った。

その顔は見るも無惨になり、顔の3分の2を失っている。

マサヤ「ヘル・ブレイズ」

ボルジアントの周りに黒炎が回り込み、一気に飛び込む。一瞬にして灰になった。

簡易火葬だ。

これでボルジアントは成仏できる・・・んじゃない?。

メアリー「ふんっ！」

メアリーが鎖を引きちぎる。マサヤは呆然としていた。
おいおい、体見せてみるや。筋肉だらけだろ。

メアリーは携帯を取り出す。

メアリー「ロイ？終わったわ。で、分かったことなんだけど、マ
スターの名はアシュリー、女性。相当強いわ。」

ロイ「大丈夫だ、俺を誰だと思っている。」

メアリー「そうね。あと、マサヤがビギニングに覚醒したわ。」

ロイ「ほっほお、早いな。使えていたか？」

メアリー「ええ、もうじき倒れるはずよ。」

ロイ「まあ最初はそうだな。分かった、じゃあ先に入り口に戻って
おけ。ガイとユウトが居るはずだ。」

メアリー「了解、気をつけてね。」

27話 お嬢様による1方的な攻撃ってどーよ(1)

間が空いたため、一応キャラを確認

ライラ・パルキオプス
(フィアラル)

リップ、シュバリエ
(ハーピー)

の3名で行動している。

ライラ「なかなか敵が現れませんね・・・」

リップ「班の数は確か6つですよ。そのうち、メアリーさんが連絡してきたってことは、5つのうちどれかですね。或いは1班以上。」

ライラ「早く来ませんかねえ」

シュバリエ「・・・ブロッサム様と似て貴方もなかなかの戦闘狂ですね。」

ライラ「ええ、私Sだから。」

そんなことを話していると、シュバリエがいきなり背筋を伸ばし、周囲を警戒しだした。

どうやらシュバリエは周囲の気配を把握できるようだ。正確に。

シュバリエ「いますね・・・A級が2人・・・。まだ気づかれてません。」

ライラ「Aって強いのか？」

シュバリエ「ブロッサム様はSです。でも私たちじゃ勝てっこないです。」

ライラ「だから私が居ますよ。あなたたちには指1本触らせませんで安心して下さいね。」

シュバリエ「あの角を右に曲がって、左に曲がったところのドアの奥です。かなり広いですね。」

ライラ「ええ、急ぎましょ。」

最初のうちは白で統一されていた壁の色も、角を曲がった瞬間、黒

も目立つようになった。紫も混じり、不思議な雰囲気醸し出している。

ライラはドアを慎重に開ける。

？「え？来たって？」

？「ほら、あそこ！」

？「ほんとだ！しかも全員女・・・」

二人の醜く太った男が2人。奥のショーケースにはお菓子がたくさん飾ってある。

探せばなんでもありそうだ。

「つと、自己紹介からネ。オデの名前はミルケリーム」

「オイラはシルククレイム。よろしくだよ」

ライラ

「地より出でよ。翼を失い、正義に見放された墮天使。悲愴と憎悪の矢を放て！ケルビム！」

狡猾すぎる故、精霊界から追放されし魔術師。黒きナミダを力に換え、真の主の武器となれ！ハウリロプス！

悪を砕き、善を全てとする光の精霊。悪しき者に慈悲なき制裁の光を！ヴィーナス！

主を守護するためだけに産まれた、悲しき黄金の盾。今こそ、産まれた意味を覆し黄金の矛となれ！パーフェクト・ガーディアン！！」

2人の話を完全に無視したライラ。
そして、4体の精霊を召喚する。

ケルビムと呼ばれた精霊は天使だが、全身が黒く、翼が赤い鎖で縛られている。手には黒く輝く弓。矢にはとてつもない魔力が込められている。目は怒りに満ちあふれ、主といえど選択を間違えれば逆に逆もありえるだろう。

ハウリロプスと呼ばれた精霊は魔術師のような形状をしており。シルクハットを目深に被っている。手には真っ白の手袋。まるで手品師のような格好だ。口元はわずかに釣り上がっていても不思議だ。もしかしたら1番危険かもしれない。

ヴィーナスと呼ばれた精霊は、超いい人そうな女の天使だ。頭上には天使の輪。時折翼を動かしている。目は閉じていて、口元は優しい笑みを浮かべている。

パーフェクト・ガーディアン。恐らく最強だろう。金色のブロックを積んだようなその巨体に、同じくらいの高さの盾。大砲やガトリングが搭載されていて、もはや城だ。この精霊は15メートルくらいだが、他は3〜5メートルだ。この黄金のボディには傷ひとつつかなそうだが、あまりに大きいので下を潜られたりしないだろうか。リップとシュバリエは口をパクパクさせている。

ライラ「魔力供給お願いしますね。まだ余裕ですけど。」

28話 お嬢様による1方的な攻撃ってどーよ(2)

リップ・シュバリエ「ヒーリング!」

ライラが緑色のオーラに包まれていく。ライラは気持ちよさそうな顔をしている。

ケルビム「久しいな、ライラ」

ハウリロプス「珍しく護衛も居るぜえ？」

ヴィーナス「あの醜い2人組みが相手ね。」

パーフェクト・ガーディアン「・・・」

ライラ「なるべく早く終わらせようね」

ミルケリーム「無視すんなネ!」

シュルクレイム「いくヨ!」

2人はお菓子を投げ捨てて戦闘態勢に入った。

ミルケリーム「お菓子の邪魔をして」

シュルクレイム「ただで済むと思うなよ」

ライラ「まだ手は出さなくていいわ。」

ケルビム「いや、早く終わらせるといったのはオヌシだぞ？」

ライラ「まゝだ！」

ハウリロプス「いいじゃねえか、ケルビム。ちょっとくらい待てつて。ライラは敵の攻撃を見てみたいってよ。」

ケルビム「・・・ああ」

ミルケリーム「つか、なんだネあの馬鹿でかいゴーレムは・・・」

シュルクレイム「いくしかないヨ！脂肪弾！」

シュルクレイムの両手に脂肪と思われるものが浮かび、凝固する。ライラに向けて投げつける。

しかし、パーフェクト・ガーディアンによって阻まれる。傷ひとつかない。

まだまだ！とシュルクレイムは次々と発射する。

ミルケリーム「俺もいくネ！ミートボールボム！」

ミルククリームの両手にボーリング玉くらいのミートボールが現れる。
食べれそうだ。

ミルククリームの投げたミートボールは着弾地点で爆発した。
結構な威力だ。直撃すれば人一人は確実に死亡するだろう。

ミルククリーム・シュルクレイム「うりやりやりやりや！」

ミルククリームは爆弾を投げ、シュルクレイムは弾丸を飛ばし続ける。

ズガガガガガガ！！！！

煙でライラ付近が見えない。

ミルククリーム「へへ、俺たちのお菓子タイムを邪魔するからネ」

シュルクレイム「なんだ、思い知ったかヨ」

ライラ「ぬるいわね、」

煙がだんだんと晴れていく。

そこには人間3人と精霊が4体。
状況は変わっていない。

パーフェクトガーディアンにはやはり傷ひとつ付いていない。

ライラ「ガーディアン、力の差を見せ付けなさい？」

パーフェクトガーディアンは少しだけ態勢を変える。
直後、嵐のような音が部屋中に轟いた。

パーフェクトガーディアンの盾から無数の銃や大砲が飛び出し、2
人に向けて一斉射撃を始めた。

大砲は2秒おきごと、ガトリングガンは絶え間なく発射されている。
盾のに無数に広がる銃や大砲は常に動きっぱなしだ。

しかも弾切れはない。弾の供給源はライラの魔力だ。
尽きるはずがない。

ヴィーナス「ガーディアンさん、やっぱりお強い」

ハウリロプス「なあ、俺ら帰ってイイか？」

ケルビム「せっかく楽しめると思っていたんだが」

ライラ「ダメよ、あんなんじゃないやられません。大丈夫ですよ。ちゃんと戦えますから。」

29話 お嬢様による1方的な攻撃ってどーよ(3)

パーフェクトガーディアンによる一斉射撃により、煙が立ち込めている。

何をされるか分からないので一同はパーフェクトガーディアンを盾に隠れる。

あの猛攻を耐えられるはずはないと、リップや精霊たちは思った……

シュバリエ「A級2人、生存しています……。」

ライラ「ヴィーナス、煙を。」

ヴィーナス「了解しました。えいっ!」

周辺の砂煙は全て消えた。

一瞬で消えたので、おそらくどこかへ飛ばしたのだろう。

空間移動は、質量が小さいほど簡単にできるため、砂煙程度なら10km以上遠くにも飛ばすことができる。ヴィーナスは言う。

そこには、男が2人、ミルクリームとシュルクレイムだ。2人とも無傷である。

ミルクリーム「ふう〜痛いネ、でも全く効かないネ」

シルククレイム「でもどうするヨ、攻撃全く効いてないヨ」

ミルケリーム「こうするネ。デンジャー・ワールド！」

部屋がガクガクと動き出し、パネルが割れ、たくさんの突起物が出てくる。

天井には鍾乳洞の先が丸っこくなったようなもの、床は足つぼのようなもの、壁には硬い柔毛に似た形のもので出現した。

ハウリロプス「なるほどなあ。お前らは物理攻撃は全く効かないんだな。そのお肉で全部弾いちゃうんだ。俺もそんなの漫画の世界だけだと思ってたけど、實在すんだなあ。」

これもフィクションだが、スルー。

ライラ「少し違いますね。あのお肉はただのお肉じゃないです。あのお肉には密度の濃い魔力が混ざっています。故に、当たって致命傷になる確立はゼロ。」

ケルビム「なんなら試そう。」

ライラ「ええ。」

ケルビム、ハイン・ソルアロー！

ケルビムは黒光りする弓を構え、右手で矢を生成する。紅く染まり、血液が流れているようにみえる。矢を弓にこめると、弓に赤みが増す。ケルビムは目を細くし、狙いを定める。

ケルビム「喰らえ！」

矢を放つ。

矢は2人に向かって1直線に飛んでいく。

ライラ「サデル・ツインアローズ！」

今度は紫色をした矢が現れる。どちらも禍々しい。弓にセットすると黒に青みがかかる。

ケルビム「はあっ！」

2本の矢が飛んでいく。

まずは先に放った矢が着弾。1発ですさまじい破壊力。その周辺は床も抉られ、足つぼのゴツゴツもきれいに無くなった。

続いてサデル・ツインアローズ。

さっきの矢は爆発系だったのに対し、こちらは放射系のような着弾地点からは蒼い炎がメラメラと燃えている。

さっきの爆発により、天井の鍾乳洞のようなものもガラガラと2人に向かって落下する。

ライラ軍は、その風圧により、一瞬怯んだが、すぐに戻った。

ライラ「ヴィーナス、煙」

ヴィーナスはまたも煙を転移させる。

そして、そこに2人はいない。

ケルビム「あのくらいで木っ端微塵とは、情けないな」

シュバリエ「う、上です！上に1体！、そして・・・」

シュルクレイム「はい嬢ちゃん、黙るヨ」

ライラ「見つけた！ハウリロプス、まずは1体閉じ込めて！」

ハウリロプス「飛んで火に入る夏の虫ってねwセキュリティ・ゾーン！」

シュルクレイム「え、な、何だこれは！」

シュルクレイムの周りに0と1でできたコードが大量に現れ、シュルクレイムを中心に、直径2mくらいの球体になった。

若干透けていて、シュルクレイムが中からこの球体を殴りつけているのが分かる

口をぱくぱくさせているが、出せヨ！出せヨ！と叫んでいるのだらう。

ハウリロプスはライラにどや顔をする。ライラもどや顔を仕返す。

ミルケリーム「忘れんなネ！メタボリック・ネット！！」

ミルケリームは四肢を大きく広げ、それを全て前に突き出す。すると、魔法陣が現れ、汚いが大きい網が現れる。

ライラ「ガーディアン！」

パーフェクトガーディアンはそのまま網を被ることになった。

ミルケリーム「はははは！かかったネ！その網は脂肪でできているネ。だからそのゴーレムはもう動けないネ！オデの脂肪は硬いネ。」

パーフェクトガーディアンは、網を引きちぎる。

パーフェクトガーディアン「つまらん」

ミルケリーム「え？」

P Gは拳で球体の檻に閉じ込められたシュルクレイムを叩き潰す。グシュ、という嫌な音になった。恐らく、球体の中にいたため、逃げようが無かったため、跳ね返すことができなかったのだろう。

P G「主殿、帰るぞ。つまらん」

ライラ「ええ、あとはケルビムに任せますわ。ハウリロプス、ヴィーナス、貴方たちももう帰っていいわ。」

ハウリロプス「ん、ああ。何か出番少なかったけど、可愛いから許してやるか。」

ヴィーナス「久々に会えて嬉しかったわ。お元気で。」

各自、魔方陣を出現させ、中に入っていく。

ライラ「さあ、ケルビム。あなたが止めを刺すのです。弱点はあります。」

ミルケリーム「弱点なんかないネ！完全無欠のこの脂肪、敗れたこ

とは無いネ！」

ライラ「彼の弱点、それは物理攻撃以外の攻撃よ。つまり、瘴気。」

30話 お嬢様による1方的な攻撃ってどーよ(4)

ケルビム「ほう、瘴気とな。しかし、奴に効くのか？」

ライラ「ええ、間違いなく効きます。彼は特殊攻撃には弱いはずですよ。」

リップ「・・・このフィールドですか？」

ライラ「正解です。このフィールドは、あの2人のためだけに創造されたフィールドで、私たちがあの壁に叩きつけられたとしましょう。もちろんただじゃすみません。しかし、彼らの場合は違います。壁に激突しても勝手に跳ね返されるでしょう。そんな最強の防御力を誇る彼らのために作られたフィールドに、なぜ毒や瘴気を撒き散らすギミックがないか。それは、彼らの弱点だからです。彼らは、自分たちのためのフィールドによって、滅ぼされるのです。」

ミルケリーム「あの金ピカがいなけりゃこっちのもんだネ！喰らえ、ミートボールボム！」

ライラ「ケルビム、全部落としてください。」

ケルビム「了解した」

上空から爆弾が降ってくるが、ケルビムの放つ矢によって全て上空で爆発してしまった。

ケルビム「攻撃力はさほど高くないのだな。恐れるに値しない。」

ケルビムは更に矢を放ち、ミルケリームがつかまっている突起物を破壊する。そして、落ちてくるミルケリームに拳で1発。

ミルケリームはすごい勢いで飛び、壁に激突する。しかし、弾き返され、2バウンドして止まる。

ミルケリームは起き上がり、何とか策を練ろうとしている。

このままだと、弱点がバレてしまう。あの精霊なら絶対できることだ。

既にバレている。

ライラ「もういいわ。ケルビム」

ケルビム「ああ。シエルビー・アロー！」

矢の形をしたようなユラユラしている不安定な黄緑の炎が、ミルケリームに命中する。

それは、弾き返されることなくミルケリームの体を貫く。が、傷はない。

ミルケリーム「う、何だネこれは・・・ナンダ、ウウ・・・くソ！
うう宇和輪ああああああああああああああああああアア
アアアアアアアア！！！！！！」

ミルケリームは突然発狂し、のた打ち回った。

ライラ「もういいわ、帰りましょう。この程度の瘴気に負けるとは。」

ケルビム「ならば私も帰ろう。また必要なときは呼んでくれ。」

ライラ「ええ、ありがとうございます。」

ミルククリームを残し、部屋を後にするライラ一行。
リップとシュバリエは少し引きつった顔をしている。

ライラ「?どうしましたか?」

リップ・シュバリエ「いいえ、何も・・・」

シュバリエ「あ、ライラさん。A級の反応がなくなりました。」

ライラ「へえ。ところで何番隊だったんでしょうね。」

お嬢様は歩く

31話 花の女王（前書き）

だんだん誰が誰だか分からなくなってきました

これは1話完結です

31話 花の女王

ブロッサム、ロイはジニアットのマスター、アシュリーの元へ向かう途中、敵の奇襲を受けた。

そして、ハーピー唯一の戦闘狂でありマスターでもあるブロッサムがその戦いを引き受け、ロイにマスターを探すように命じる。

sideブロッサム

ボシキ・リャン。

大して強いわけでもないのね。

早く片付けてロイに追いつかねば。

ブロッサム「フレグランス！」

ブロッサムの前に花のつぼみが十数個現れる。

どれもピンク色で、あまり大きくはない。

ブロッサム「シュートオ！」

ブロッサムの前にあるつぼみがピュンピュン！と音を立ててボシキを狙う。

しかしその反面、全く見当違いな方向に飛んでいるものもある。

ボシキ「当たるかよ！」

ボシキは左右上下、巧みに動き、全ての蕾をかわした。

蕾は壁や床、天井に激突する。

そして、潜り込む。

ボシキ「へへ、甘い姉ちゃん！今度は俺から行くぜ。ランドセイバー！」

ボシキの両手に魔力でできた緑色の薄い幅広の刃が現れた。

ボシキ「脳天から真つ二つにしてやるよ！」

ボシキがブロッサムに襲い掛かる。

ブロッサムに駆け寄り、まず左で頭を貫こうとする。少し頭を反らし、ブロッサムは攻撃を免れる。左手を伸ばしたままボシキは右回転し、右手でブロッサムに斬撃を繰り出す。

またも銅を少しそらし、斬撃を凌ぐ。

ボシキは攻撃の手を休めることなく両手を頭上に掲げる。そして、それを一気に振り下ろす。

剣の残像がうつすらと見える。ボシキは舌を出す。

だが、ブロッサムには当たらない。

舌を戻し、そのまま左に回転し、両手で剣の一閃を繰り出す。

ブロッサムはバックステップで避ける。

ブロッサムはふうと息をつき、右手に剣を出現させる。柄は赤、緑、黄色のマーブルな色を持つ花だ。

ボシキが更に追い討ちをかけようとする。

右手でブロッサムの頭上から振り下ろそうとするが、花剣によって防がれる。

しかし、左の剣が腹へ忍び込んでくる。

ブロッサムはそれを見逃さず、体をひねってギリギリのところかわす。

ブロッサムは剣で右手の剣を押し返し、伸びきっているボシキの左腕を狙う。

ボシキは態勢を崩されながらも右手の剣で防ぐ、なんとか間に合ったと安堵の表情を見せる。

しかし、ブロッサムは前蹴りで少々油断気味だったボシキの腹を蹴り飛ばす。

ボシキは怯んだが、ブロッサムもそれ以上は追ってこなかった。

ボシキ「さすがに一筋縄ではいかねエか。」

ブロッサム「二筋縄でもいかないわよ？」

ボシキ「そんな言葉知るかっの！」

ボシキは再び動き出し、ブロッサムに向かって斬撃を繰り出す。

ブロッサムも防御だけでなく攻撃し始め、お互いの剣がぶつかり合い、金属音を散らす。

花剣は剣とぶつかり合うたびに少しずつ剣の下からピンク色に染まっていく。

その様子にまだボシキは気づかない。

そして、さっきブロッサムが放ったフレグランスたちは、壁、床、天井から小さい芽を出していた。

だがコレも気づかない。

ブロッサムが若干防戦一方なのはこれらに気づかせないためである。

ブロッサムは若干だが、攻撃もするようになり、ボシキに当てるのではなく、剣を狙っていた。

ボシキは、この剣は飛ばねえぞ。と笑う。

ブロッサムは無視して斬りかかる。

キンキンキン

1秒間に2回は鳴っている。

とてつもないスピードだ。

両者ともに超人的なスピードで立ち回っている。

しかし、花剣の性能、フレグランスの状況からすると、ブロッサムのほうがアドが大きい。

ボシキは後退し、手に魔力を集中させる。

すると、剣が緑色から水色に変わる。

すると刃は長くなり、幅が狭くなった。

スピード重視の刃である。

ブロッサムの剣は刃物とぶつかり合わなければ意味がない。

そして、ボシキは今、更に速く動く剣を装備した。

剣を動かしているときは相手の剣どころではないだろう。

自分の剣を動かさなければ速すぎる故動きが鈍ってしまうからだ。

常に次の攻撃を頭でイメージし、行動しなければいけない。

相手の剣より、自分の剣なのだ。

ボシキは再びブロッサムに剣を振るう。

今度は残像がハッキリ見える。青白い筋だ。

ボシキは双剣を巧みに操り、音速の剣を振るう。

ブロッサムは剣を全て受け止める。全ての剣を最大の衝撃で受け止めるように花剣を操る。

花剣のピンクゲージが半分に達した。が、しかし、ボシキの目は完全に自分の剣に向いていた。

故に、ブロッサムの剣の変化に気づかず、剣を振るい続ける。

フレグランスの芽は、膝丈ほどになっていた。

ボシキはさすがに気づいた。

ボシキ「な、何だコレは・・・」

ボシキは振り返り、緑が増えた通路を見て驚愕する。

ブロッサム「こっちよ！ちゃんと見てなさい！」

ブロッサムは振り返っているボシキに斬りかかる。

ボシキ「クツ！」

ボシキは両手でガードする。

そして、ボシキは気づいた。

ブロッサムの剣の色が変わっていることに。

ボシキ「剣が・・・」

ブロッサム「コレでアンタはもう終わりだね。それまでに私に早く止めを刺さなくていいの？」

ボシキは唇をかみ締めながらブロッサムに斬りかかる。
ボシキでも分かる。

力の差が。

そして、斬撃を繰り返しているうちに、花剣のギミックにボシキが

気づいた。

ボシキ「それ、まさか斬撃の衝撃で……」

ブロッサム「そうよ。」

ボシキは唸る。この剣だと進行が早まるのは一目瞭然だ。そう悟ったボシキは後退し、両手の剣を重ねる。

すると、刃は赤くなり、刀身は太く、幅も広くなった。

ボシキは回転して、その勢いを利用して剣を振るう。

ブロッサムは横から襲ってくる刃を避けようとはせず、剣で受け止める。

ブロッサムは耐え切れず、吹き飛ばされ、壁に向かって飛んでいく。

ブロッサム「フレグランズ！」

壁のツタが高速で壁を伝って伸びてくるが、衝撃は殺せず、壁をへこませる。

ブロッサムはヨロヨロと立ち上がり、笑う。
剣のゲージがMAXになっている。

ブロッサム「なかなか、よかったんじゃない？」

ボシキ「まだまだあ！」

ボシキは更に回転し、剣を振るおうとする。

が

ブロッサム「花は美しいだけではなく、自分の身を守るために毒をもつのよ。あなたは動けなくなるわ。サイレント!!」

剣先をボシキに向ける。

剣先から桜が噴き出す。それは、ボシキを包み込む。

ボシキは剣を消滅させてしまった。いや、もうすでに動けず、魔力供給ができなかった。

ボシキはそのまま倒れ伏す。

ブロッサム「動けないでしょ？花はね、身を毒だけでなく武器でも守るのよ。棘よ。あなたは意識がハッキリしている中でその棘に包まれて死ぬの。」

ボシキ「何・・・だと？」

ブロッサム「ボシキ・リャン、あなたを剣使いとして敬意を表すわ。」

ブロッサムはロイの駆けていった道を進む。

ボシキの足元から草が伸びてくる。

ボシキ「く、来るな！」

足の先から草が絡みついてくる。草には棘が無数についており、皮

膚にズブズブと刺さり、血がにじむ。

ボシキ「痛！う、ううううううおおおおあああああああ
あああああああああああああ

! ! ! ! ! ! ! ! ! ! !

ボシキの全身を草が包む。というより轢いていく。

草のカーペットはそれから2メートル程前進し、成長が止まった。

ボシキの声はないが、ボシキのいた場所は赤く染まっている。

ブロッサム「ちよつと惨かつたかしら」

32話 魔狼と魔女（1）

400人にも及ぶ兵士の殲滅を任されるイグナムとサフィア。しかし、そこで見せたサフィアの本性。

彼女は人間ではなく魔女であり、強さを求めて人間界に降りてきたという。

そして、イグナムはサフィアから決闘を申し込まれる。

イグナムの目の前には3メートルほどの死神が3体。

浮いているせいか、大きく見える。

それぞれサイズを持っている。

骸骨だから表情は分らないが、笑っているようにも見える。

イグナム「全て計算のうちだったってわけか・・・」

サフィア「そうよ。早く倒してアタシと勝負しよ」

イグナムはサフィアに今襲ってくる気がないことを確認すると、死神たちに視線を向ける。

死神が動き出す。中央の死神がサイズを振り上げる。イグナムは振り下ろす前に横に移動し、右側の死神に飛びかかる。

中央の死神のサイズは空振りし、イグナムめがけて横に振る。

イグナムはさらに右に横っ飛びし、サイズを避ける。が、死神からは視線ははずさない。

中央の死神のサイズが右側の死神に向かって止まらない、右の死神はサイズの柄で受け止める。
何事もなかったようにイグナムへと視線を向ける。

イグナム「蒼魔炎！」

イグナムがそう唱えると、イグナムの口の周りに3つの魔法陣が出現し、口の中からは蒼い炎が溢れ出す。

イグナムが再び死神に飛び掛る。左の死神が前に出てサイズで受け止める。

サイズの柄とイグナムの歯が擦れあって、火花が散る。

そのうち、サイズの柄に青い炎が伝わっていく。死神はたまらずイグナムを押し返す。すると、青い炎はだんだんと消えていった。

イグナム「召喚！魔刀火鼬^{ひいたち}！」

イグナムの口に忍者刀のようなものが現れる。

イグナム「リンクー！」

口の中の炎が刀を伝っていく。そして、刀全体を包み込む。

魔方阵は剣に吸収され、剣には魔方阵の模様が刀身にミニサイズで3つ浮かび上がる。

前に出ていた左の死神がサイズを掲げて襲い掛かってくる。

イグナムは軽いステップで横にステップし、首をひねって刀を操る。死神の懷に潜り込み、はねる。眼前に来たところで首を思い切りひねる。

刀が死神の頭部を直撃する。死神の頭蓋骨は耐えられず穴を開ける。その瞬間、死神を力を失いバラバラと崩れだした。地面に骨が落ち、

しばらくすると色が薄くなっていって、消滅した。

残り2体

仲間がやられようと平然としている死神は、まさしく地獄のソレだ。イグナムは自分の幻術の完成度の高さに少し興奮した。

こうなっていたのか、と今まで幻術にかけられたものを同情する。

死神はお互いの動きを邪魔することなく、しかし自分勝手に動く。

イグナムは右側の死神に斬りかかる。

中央の死神がサイズの石突きでイグナムの腹部を突く。

イグナムは空中で1回転して、攻撃を避けるが、軌道を大きく逸れて着地する。

左の死神が、サイズを後ろに大きく振る。イグナムはもちろんこの後の攻撃を知っている。

左の死神はサイズを投げた。水平に回転しながら飛ぶそれは、イグナムめがけて飛んでいく。もう片方の死神も同じ行動を取った。

イグナムに向かって飛んでいく2つのサイズ。

1投目は身をかがめることで簡単に避けるが、2投目はそれを予測していたのか全く避けようがない。

イグナムは首を下から上に振り、刀でサイズの軌道を逸らす。

サイズは消え、死神に新たなサイズが現れた。

33話 魔狼と魔女（2）

2体の死神は浮遊しながらイグナムに急接近する。

死神に挟まれるように陣取られたイグナムは、火鼬を口から放す。

刀は空中で自ら動き、イグナムの腰の鞘に向かう。

最後に、口に残った青い炎を死神たちに向けて適当に放つ。

死神には何ともなかったが、牽制としては十分だった。

イグナム「レイズ！」

イグナムは右前足を高く振り上げ、魔力をこめる。すると、右前足が発光し、バチバチと帯電する。

それを勢いよく床に叩きつける。

床にイグナムほどの大きさの魔法陣が現れる。魔方陣は黄色い光を放っている。月のような魔法陣が雷を放つ。魔方陣のいたるところから出たそれは2体の死神へと向かっていく。

死神は避けようと後ろへ下がる。

1体は何とか逃げるが、もう1体は逃げる際に雷が左肩に直撃し、左腕を失った。

再生はしないようだ。衣服も黒く焦げている。

バランスがとれず死神は大きくよろける。

イグナムはそれを見逃さず、一気に接近し、飛び掛るように右手で死神の頭蓋骨を掴む。

魔法陣が現れる。今度はそこまで大きくない。

黄色く発光したそれは、またしても雷を放つ。今度は逃げようがなく、全ての雷が死神の骨に突き刺さる。眩いほどの光を放ち、死神を貫いた雷はすぐに消え、残ったのは衣服の燃えた後の灰だけだ。

死神も残り1体。

イグナム「デープスノウ」

そう唱えると、イグナムの両前足が白色に青色の筋が入ったような模様になる。

その周りには皿ほどの魔法陣が6個周回していた。

死神は動かず、こちらの様子を窺っている。

イグナムはゆっくりと歩き出す。イグナムの前足が踏んでいたところは薄氷が張っている。

イグナムと死神が対峙する。

同時に動き出す。

イグナムは飛びかかり、死神は同時に横へ逃げ、サイズをイグナムに向けて薙ぐ。

イグナムはジャンプして避け。右前足の前に4つの魔方阵を移動させる。

すると、中央から小さな氷の弾丸が飛んでいく。

死神は横に高速移動しながらそれらの弾丸を全てかわす。着弾地点はわずかに凍っている。

イグナムが着地する直前、死神がその瞬間を狙ってサイズを掲げて接近してくる。

サイズを振り下ろす。

ガキン！

イグナムは咄嗟に火鼬を口に銜え、何とか攻撃を受け止めた。

死神は追撃を試みる。イグナムはそれを避けつつ、たまに刀でいなす。サイズはかなりの速度で動いている。

攻撃の合間にイグナムがリンクと言い放つ。

刀は冷気を帯びる。魔方陣も刀に吸われ、6つの紋章になる。

死神の攻撃を受け続けていたイグナムが、サイズを弾き返した。

5つの魔法陣が浮き出る。

刀に雪の渦が巻き、切っ先に行くにつれて細くなっていく。

イグナム「氷刀・雪狐、ユキキツネ魔氷連刃！」

イグナムは口から雪狐を落とす。刀はイグナムの胴体を囲むようにいくつもの刀が現れる。

胴体を十数本の刀が囲む。

イグナム「雪月花！」

花のように開く刀はイグナムの合図によって一斉に死神に向かって飛んでいく。

死神はサイズを振り回す。一見デタラメだが、サイズは確実に刀を防いでいる。

しかし、それら全てを防ぎきれず、何本か死神の体を貫く。

その数4本。

刀が貫いた場所は、パキパキと音を立て、体が凍り付いていく。体のほとんどが凍った死神は浮遊できずに床に落下した。

イグナムは刀を戻し、再び前足に戻る魔方阵を確認してから、前足で死神の頭蓋骨を踏み潰す。

バリン！と音を立て、頭蓋骨が砕け散る。

3体の死神が絶命した。もともと命などなかったかもしれないが。

死神の残骸も光の泡となって消滅した。

「アハハ！いいじゃん！全部倒したわね。けれど、ここからが本番よ。全ての誇りをかけて、あなたを叩き潰すわ。魔狼さん」

「魔女、訊きたいことがある。魔女、その他の魔人は人間界では長くは体が持たないはず。ではなかったか？」

「ええ、そうよ。てことは、分かる？」

「人間の・・・か。」

「当たり前。この体は人間の少女。名はビスカ、かなりの魔力を有していた。人間界に降りたばかりのアタシは幸運にもそんな少女と出会った。」

「殺したのか」

「まあ、そうよね。でも彼女から殺してくれって言うてきたのよ？」

「ほう、まあ私には誰が死のうが生きようが構わんがな。」

「アタシだって、ちょっと躊躇ったわよ。魔力は惜しいけど、少女

じゃねえ……。もっとうそうセクシーな美女の体を頂きたかったわ。
」

「ということは、何か理由がありそうだな。」

「彼女はね、幼いにも関わらず、とても醒めた口調だったわ。怯える様子もなく、ただ力になりたいと懇願してきた。とにかくここいから体をもらったけど、この感覚からいうとこの子は未だに生きている」

イグナムは、無関心に、ふんと首を縦に動かす。

34話 魔狼と魔女(3)

サフィリア「興味なさそうね・・・まあいいわ、始めましょ」

イグナム「ああ、そうしよう。少女の話などに興味はない。お前を倒さねば終わりそうにないしな。」

イグナムは火鼬を口に銜え、サフィリアに向かって駆け出す。

横を掠めるようにとび、刀をサフィリアの顔に当たるように調整しながら首を振る。

サフィリアは態勢を低くしてそれをかわす。そして、体をくるりと反転させ、イグナムのほうを向く。

そして、イグナムと退治するように並ぶ。

体格差は歴然である。少女に対して、少女2人分はあるかという頭の高さ。モンハ みたいにどんなにデカくても狩ってしまうなんてことはあまり想像できない。

サフィリアは態勢を低くし、跳んだ。少女とは思えない跳躍力でイグナムの頭ほどの高さに到達した少女は、イグナムの顔に蹴りを入れる。

不意をつかれたイグナムはそれをまんまと受けてしまった。

またもや少女とは思えないキック力で、イグナムは後ろに真っ直ぐ吹っ飛び、壁にめり込む。

少女と思って油断していた。パワー、スピード共かなりの能力値だ。

少女は着地後もイグナムに向かって急接近する。イグナムの頭の下に潜り込み、真上に足を蹴り上げ、イグナムの顎を蹴り上げる。そして、前足をつかんで投げ飛ばす。

イグナムは蹴られ投げられで、わけが分からぬまま飛ばされ続ける。

少女は空中のイグナムに向かってまたも跳躍し、踵落としを背中に与える。

すさまじいスピードでイグナムは落下し、ズドオオンという音と共に床に落ちる。

イグナムは血を吐きながらも立ち上がる。

少女はその近くに着地する。

イグナムは咆哮する。少女にここまでやられるとなると、プライドもクソもあつたものじゃない。

イグナムは途中で落とした火黽を魔力で鞘に戻す。

イグナム「魔刀・闇乃雲^{アンノウン}」

暗い色をした刀が現れ、口に銜える。

イグナムは、少女に向かって走る。刀を少女に向けたとき、刀から煙が放たれる。薄暗い煙は少女を包み込む。

「こんなの効かないわよ。さっきの見てなかったの？・・・」
「・・・」

この煙には魔力は込められていない。つまり、何の変哲のない煙だ。少女は慌ててかき消すが、既にイグナムはいない。

イグナムは、少女の頭上にいた。イグナムは落下と共に少女に向かって首を振る。

しかし、少女はそれを跳んで回避し、刀はまたも空を切る。

「蒼魔炎、リンク！」

口から青い炎があふれ出し、刀も炎を纏う。

イグナムは少女に向かって走り、前足と組み合わせて少女に連続で攻撃を繰り返す。

少女は、跳んで、時折蹴りや手刀を使ってそれらをかわす。

「レイズ！」

蒼魔炎を使いながらレイズを発動する。魔法陣が少女を狙う。

「クッ！」

少女は魔方陣を展開し、攻撃をガードする。魔方陣はレイズを全て受け、ボロボロになって消滅した。それを狙って前足を少女に向かって引つかくように突き出す。少女は避けきれず、腕をクロスして防御を試みるが、吹っ飛ばされて壁に激突する。

少女はすぐに立ち上がり、魔方陣を出現させる。

「くっ、ファイアボール」

少女がそう呟くと、サッカーボール大の炎の玉が数個現れ、イグナムめがけて飛んでいく。

イグナムは所詮初級魔法だと、前足で弾こうとするが、桁違いの魔法だった。

たまらず避ける。横に走り続けて全て打ち終わるのをまつ。

「ハア・・・ハア・・・何をした・・・」

走りながらイグナムは少女に問う。

「少しだけ闇属性を混ぜたわ。ここまで威力が上がるとはね・・・」

「そういうことが、なら！」

イグナムは突然止まり、黒い魔方阵を出現させた。

炎の玉はそれにぶつかり、ジュツと音を立てて消えた。

35話 魔狼と魔女（4）

「そっちが闇属性で攻撃してくるなら、こっちも闇属性で防げばいいわけだ」

属性には

火、水、氷、雷、土、稀に無、闇、影、風、光がある。

人は生まれつき得意な属性や不得意な属性を持って産まれる。

得意な属性はもちろん威力が上がったり、消費魔力が少なくて済む。逆に不得意な属性は威力はさほど変わらないが、魔力の消費が大きい。

属性には相性がある。

たとえば、火には水や土が有効である。

闇や光は相性が関係ないが、闇は闇に弱く、光は光に弱い。無属性は特にそういうものはない。

これは、あまり一般に知られておらず、魔人などがとても詳しい。

「やはり知ってたわね。だからって変わらないわ。闇同士だったら単純に攻撃力の勝負よ」

イグナムはレイズを発動するが、魔法陣が暗い。

魔方陣から雷が出現する。雷は黒色になっている。

「雷に闇属性を混ぜた。どうだ、避けれるか？」

「アンタもできたのね。だけどまだ甘いわ」

少女は後ろに下がり、魔方陣を出現させる。

両手の前に現れた魔法陣はレイズを次々と受け止め、進行方向を逸らす。

レイズを全て防ぎきつたあと、魔法陣を重ねる。すると、黒い剣が現れる。

「この剣は刃の部分が闇属性だけで作られた剣よ。」

「ふん、闇乃雲は闇属性だが薄いな。元々あれは手加減用だからな。」

イグナムは闇乃雲を消滅させる。

「精霊刀・聖魔」セイントデビル

刀身が真っ黒な刀が現れた。イグナムはそれを口に銜える。

「この刀は刃の部分だけではない。柄も、鍔も、何もかもが純闇属性だ。そんななまくらでこの刀を破ると？」

少女は走る。両手で持った剣でイグナムに斬りつける。イグナムは首を少し動かして受け止める。剣の刃はジジジとスライドし、鍔の部分で止まる。イグナムは首を振って少女を振り払う。

少女は振り払われて後ろに大きく後退する。

あの刀は確かに脅威だが、触れなければいい話。避けつつ少しずつダメージを与えようという結論に至った。

少女は再び走り出す。両手を掲げる、それに釣られてイグナムは首を振る。

だがコレはフェイント、両手を素早くしまい、態勢を低くして前足

を切りつける。イグナムはカクンと崩れる。イグナムは斬られた足を振る。運悪く少女はそれに当たって吹っ飛ぶ。壁にめり込み、しかし勝機に満ち溢れた表情をしている。

イグナムはまずいと思い、さらに追い討ちをかける。刀で少女の剣を弾き飛ばそうとする。

だが、刀は口に銜えられているため、片方からしか斬撃が来ない。少女は軽々避け、するりと背後に回り、後足を斬る。

「ウグウ！」

苦しそうにイグナムはうめき声を上げる。

「くそ・・・ちょこまかと・・・」

もう既にイグナムが悪役みたいになっている。

「聖魔は血を吸い、浄化する聖なる悪魔だ、ブラッドバインド！」

イグナムの傷から体外に出ている血だけが浮き、刀に勢いよく吸収されていく。

黒い刀は血を吸った後、何事もなかったように真っ黒になる。

「まだ血が足りぬな。もっと血を・・・」

注意：イグナムは一応正義です。

イグナムから斬りつける。

少女はまたも軽くかわそうとする。

「！　　速い！」

少女の頬から血がツーンと垂れる。
それすらも刀は吸収していく。

「さすがは魔女の血、すばらしいな、魔力に満ち溢れている。」

少女は短期決戦に持ち込もうと、剣を握る。刀のスピードに合わせて剣で受け止める。

無駄に血を流させてはいけない。決めるなら一撃だ。そう悟った少女は反撃のチャンスを待つ。

だが刀もさっきと比べ物にならないほど速い。

イグナムは少女の考えていることが分かった。

短期決戦に持ち込む気だろう。戦い方を見れば分かる。
いきなり攻撃を受け止め始めたということは私に反撃するチャンスを窺っているということだ。

こちらが大きな攻撃を仕掛けたら、相手は間違いなくその隙を突く。
このままチンタラやってても埒があかない。

どうする……！！

イグナムが突然崩れる。

前足の傷から血がダラダラと流れている。相手に集中しすぎて自分の足に負担をかけていることに気づかなかった。
前足が自分のものでないように力が入らない。

少女は目を見開く。

「アタシの動きに集中しすぎて忘れてたのかしら？」

少女は剣を肩の後ろに持ち上げる。

イグナムは動けず、ただ剣を待つことしかできない。恐怖を覚える。少女は歯を思い切り噛み締め、足を踏み込み、もてる全ての力を使って剣を振り下ろす。

イグナムはそれが止まって見えた。まさに極限状態というのだろう。しかし、前足は片方しか動かない。その前足で少しだけ動き首を振って剣を受け止める。

ガキン！

大きな金属音が鳴り響く、部外者がいたら、これは不快音に他ならないだろう。

「うつつおおおおおおお！」

少女が叫ぶ、急に剣が重くなる

キン！

刀は押し負け、弾かれる。剣は振り下ろした際、衝撃波を放ち、イグナムはそれに包まれる。

衝撃波が壁に激突する。壁が抜けて、外の景色が丸出しになる。

イグナムはその手前でぐったりしている。

「来い……聖魔……」

聖魔がイグナムに引き寄せられる。

「……ブラッドバインド！」

部屋中に飛び散った血が刀に集まる。少女は呆然としている。
少女が恐怖に包まれる。

イグナムは血だらけになりながらも笑う。

「これで終わりだ！エンデ・クレイム！」

刀が光る。黒い刀が紅い光を纏う。

イグナムは倒れそうになりながらも顔を後ろに向け、顔を反対向きにするように首を一気に振る。

黒い刀から極太の紅い衝撃波が出現した。

床、天井を挟み取りながら進む衝撃波は少女を狙っている。

少女は剣を放り投げて、両手を前に出す。

「ビスカ・・・力を貸して！」

少女が本当の少女の名を呼ぶ。

すると、少女の前に直径6メートルはあるかという巨大な魔法陣が出現し衝撃波とぶつかる。

「おおおおおおおおお！！！」

両者ともに風圧で怯む。少女は耐え切れずに吹っ飛ぶ。

衝撃波が消え、床や天井が無惨に挟み取られた部屋が残る。

少女は・・・壁に寄りかかって座っている。

息が荒いが、まだ気は失っていない。

「なん・・・だと・・・？」

イグナムはこれで決まったものだと思って驚愕する。

少女は防ぎきつた。イグナムにとってそれはショックだった。

「アタシは魔女よ・・・？これくらい・・・防げる・・・わよ」

36話 魔狼と魔女(5)

「な・・・アレを喰らってまだ動けるタだと？」

イグナムはこの攻撃で仕留めるつもりだったのだろう。相手がまだ戦闘可能な状態にいることに驚愕している。

「何故だ、お前にエンデ・クレイムを防ぐだけの魔力はなかったはずだ・・・」

しかし、少女も防ぎきったのだが、ふらふらな状態である。腕や足から流れる血が、少女もただではすまなかったことが分かる。

「ありがとう、ビスカ・・・」

「！そいつだな。何をした？」

イグナムは、さっきの攻撃を防いだ鍵は、魔女の器だと悟る。

「この子はまだこの体の中で生きてるの。さっきは危なかったわ・・・」

「・・・！2対1なんて卑怯だろ・・・」

「何言ってるの・・・」

「ビスカ・・・だな？その少女とお前はなんなんだ？」

「うーん、最初は殺してから乗り移ったつもりだったけど、生きて

たのよね。生命力が半端じゃないわ。それで少し魔力を借りたの。ただし、彼女の魔力は彼女の魂に直結しているから、もちろん使いすぎると・・・死ぬわ。」

「どうでもよかったんじゃないのか？」

「アタシも生き物だからね・・・情が移ったのかしら。」

「まあいい、お前はまだ生きている。それだけで十分だ。次こそ決める。」

イグナムは再度、セイントデビル 聖魔に血を吸収させる。
周囲の血が黒い刀に集まり、触れ、吸い込まれていく。

その瞬間、少女が走り出した。

「ハッツ!!!」

少女が黒い刃を思い切り切り上げる。刃が正確に聖魔を捉えた。少女はその瞬間をしつかりと目視できた。
イグナムは不意をつかれ、刀を遠くへ弾かれてしまった。

「しまった！このままだと刀が！」

刀が床に落下し、金属音を鳴らす。
そのまま血を吸収し続け、カタカタと音を立てる。

バリン！

セイントデビル 聖魔が音を立てて飛び散った。

残ったのは柄の部分だけ。刃があつた部分には血だまりができてい
る。

少女は刀を一閃する。全く無駄のない攻撃である。刀を振り切り、
遅れて血が噴き出す。

「・・・・・・・・ッ！」

イグナムは気を失いかける。急所の喉や腹は魔力によって不可視の
装甲が形成されているが、それを切り裂いた。

傷は浅いものの、大きなダメージとなつたため、よろける。

苦し紛れに前足で少女をどける。

少女もそれは予期していなかったのか、後ろに下がって避ける。

イグナムは前足で魔方阵を出現させ、魔力の装甲を強化して、瘡蓋
がわりにする。

「聖魔が・・・」

「あの刀がなきゃ、あれはもう出せないよね？」

「そんなことはない」

イグナムは、火鼬を装着する。

「ライト、ドリユウ、スイエン、ヒョウギユウ
雷兎、土龍、水猿、氷牛・・・召喚」

イグナムの周囲に黄、茶、青、白の魔法陣が現れる。
その中央から刀の先端が現れ、徐々に全体が見えてくる。

腰に新たに4つの鞘が追加された。

「この刀は意思を持つ。故に、自分自身で行動することができる。」

そういうと、火融を手放す。

それぞれの刀は宙に浮き、獲物を探しているかのように動く。

「やれ」

イグナムの掛け声に反応し、一斉に少女に向かって刀が飛んでいく。

「こんなっ！反則・・・よっ！」

少女は避け続ける。上体を反らし、体をひねり、刀で逸らす。

「・・・ビスカ・・・もう少しだけお願い・・・」

少女の髪の毛が逆立ち、雰囲気が一変した。

「なんという魔力だ・・・」

イグナムは刀を呼び戻す。破壊されかねない。

殺気を剥き出しにする少女は、イグナムを睨みつける。

一瞬だがイグナムは怯む。

少女は、恰も前に何かあるように刀を強く突き出す。

・・・
・・・
・・・
・・・
・・・
・・・
・・・
・・・
・・・
・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

沈黙が流れる。

「グッ！」

イグナムが苦しそうに呻く。

見ると、魔力装甲を貫いている。

血が噴き出し、止まることなく流れる。

少女は力尽きたかのようにへなへなとしゃがみこむ。

「カハッ、ハアハア・・・ハア・・・」

イグナムはまたも魔力装甲を強化する、があまり大した意味はないだろう。それはイグナム自身もよくわかってはいるはずだ。装甲があらながらも血はその奥から流れる。

「フウ・・・ハア・・・火鼬、雷兎、土龍、水猿、氷牛・・・エレメント・アーティラシー！」

5つの剣は徐々に混ざり合い、一本の刀になる。これまでの忍者刀のように刀身が短くなく、かなり長いといえる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0087z/>

金剛の武人

2012年1月10日20時45分発行